國語讀本

新制版

巻九

3759
U64
資料室

41498
教科書文庫
4
810
41-1933
20000
44021

資料室

375.9
Ue4

昭和八年二月廿五日
文部省檢定濟
中學校國語科用

國語讀本 卷九

新制版

文學博士 上田萬年
榮田猛猪 共
鹽野新次郎 編

廣島大學圖書印

廣島大學教
44021
図書

國語讀本 卷九

目次

前篇

△一 やまと心　河野省三　一
△二 山路　夏目漱石　九
△三 柳さくら　（古今和歌集）　一九
△四 我が國の繪畫　藤岡作太郎　二二
五 藝術の鑑賞　厨川白村　三〇
六 五重塔　幸田露伴　三九
七 塔影　河井醉茗　五三

八 日本の環境　二荒芳德　五七
△九 十訓抄　六四
△一〇 いさよふ月　阿佛尼　七〇
△一一 東路の旅　（東關紀行）　七三
一二 高原　田部重治　八〇
△一三 俚諺論　大西祝　八八
諺語十則
一四 寺小屋　竹田出雲　九四
一五 學の話　得能文　一〇九
一六 菅公の左遷　（大鏡）　一一七
一七 けづり屑　（大鏡）　一二四
一八 御堂造營　（榮華物語）　一二八
飛鳥川の淵瀬　吉田兼好　一三三
一九 若き友よ　永井潛　一三五

後篇

雅文抄　一
雅文に就いて（參考）　佐々政一　一
賀茂翁家集　賀茂眞淵　四
一 箱根山　四
二 村田春郷墓碑　六

うけらが花　加藤千蔭　八
一　泊洒舎にて蓮を看る辭　八
二　蟲選の詞　一一
三　隅田川の秋雨　一三
琴後集　村田春海　一六
一　琴後集序　一六
二　知足庵の記　一八
三　祭芳宜園大人墓文　二〇
泊洒文藻　清水濱臣　二三
一　擣衣を聞く　二三

二　漁父辭　二四
三　月の夜友の許に　二四
四　水雞　二五
五　紅葉　二六
閑田文草　伴蒿蹊　二七
一　情は新しきをもて先とす　二七
二　冬のこゝろ　二八
三　大森求古の故國に歸るに寄す　三〇
花月草紙　松平定信　三三
一　序　三三

二 花 三四
三 月 三六
四 天にまかす 三七
五 理窟 三八
松の落葉 藤井高尙 三八
一 ものしりびと 三八
二 ものまなび 三九
三 論語 四一
檀園文集 中島廣足 四二
一 燕を題にて 四二

二 山路の菊 四三
三 氷 四四
四 漁村 四五
五 夜學 四七

廣島大學圖書之印

國語讀本　卷九

前篇

河野省三
埼玉縣の人。文學博士。國學院大學教授。

一　やまと心

河野省三

我が古典に溯り、我が國の文化を味はつて見て、靜かに日本精神の本然の姿とも云ふべき「やまと心」の特色を考へてみると、それには、先づ三つの本質的特色がある。それは實に日本精神を理解する爲に、最も必要な鍵であると思はれる。

日本心の第一の特色は、「神々しさの氣分」である。かうごうしいものを求め、かうごうしいものに感ずる性情（こころ、きだて）である。卽ち何かしら拜みたいやうな氣持である。此の神々しさが、天皇陛下を現（あき）つ

目次終

御神と仰ぎ、その御統治とその御統治への忠實な奉仕とを「神ながら」と觀ずるのである。日本民族が莊嚴清明な山川草木に神靈を認めるのも、部落の何處かに鳥居の無いのを淋しく感ずるのも、皆この神々しさの心に由るのである。それは正に日本心の一種の神聖感であつて、嚴肅な觀念の源泉である。

日本心の第二の特色は「懷かしさの情味」である。何となく親しみを覺える性情である。日本人が家族的意識の豐かなのも、自然を愛する情感の深いのも、蓋し專ら此のなつかしさに基いてゐる。日本文學の基調を爲してゐる「物のあはれ」といふことも、武士道に於ける武士の情の一面も、日本人の天子樣やお伊勢樣に對する氣持とか、鎭守の森や、うぶすな(產土)に對する鄕土愛の情緒とか、さういふ情的方面の精神生活乃至精神文化の特色は、蓋し此の日本心

古事記　三卷。元明天皇の和銅四年太安麿が勅を奉じて語部の稗田阿禮の暗誦した神代より推古天皇の朝までの傳說歷史を記錄したもの。

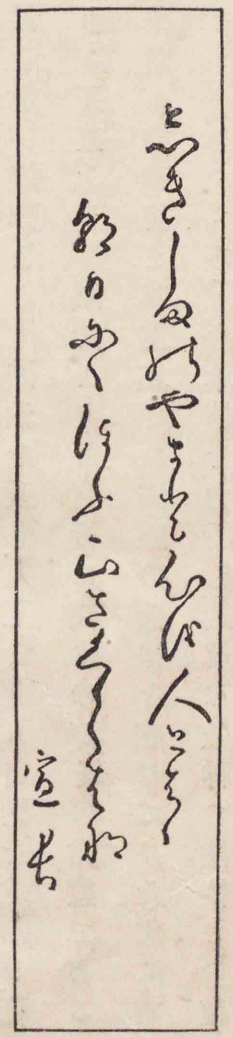
萬葉集　二十卷。撰者不詳。仁德天皇の朝より淳仁天皇の朝に至る四百餘年間の和歌四千四百九十六首を漢字の音訓で記錄したもの。

のなつかしさに根ざしてゐるのである。

日本心の第三の特色は「淸々しさの氣持」である。さつぱりとしたことを好み、あつさりとしたものを愛し、さわやかな氣分を尙ぶところに、日本人の性情の眞面目がある。日本人は執拗よりも恬澹を悅び、濃厚よりも淡泊を愛し、人工よりも自然を重んじ、權謀よりも正直を貴び、議論よりも實行に傾くのが、その常態である。國學者が古事記と萬葉集とに滿腔の憧憬を感じて、ひたすら有りのまゝの「まごころ」(眞心、本情)を力說し、純眞な敬神と性情との復活を志したのは、全く此の日本心の特性に目ざめたからである。すがすがしさを愛好する心は卽ち純眞性であり、純朴さであり、明るい心である。

日本心の神々しさと、懷かしさと、淸々しさとが、日本の神社とな

り、國體となり、武士道となり、將た國旗となつてゐるのである。神社とは畢竟、神々しく、懷かしく、清々しい所に外ならない。紅い日の丸を白地で包んだ日本の國旗は、萬國の國旗の中で、最も神々しく、なつかしく、すがすがしいものであることは、何人も一見して直



本居宣長筆蹟

觀する感じである。本居宣長が「敷島の大和心を人問はゞ、朝日に匂ふ山櫻花」と詠じたのは、此の點から見て、さすがに善く日本人の特性を看破し譬喩し得た千古の絶唱である。

此の日本心の特性たる神々しさと清々しさとが抱合すると、そ

筆蹟
しきしまのやまと心を人とはゝ朝日にほふ山さくらはな　宣長

本居宣長
江戸時代の國學者。伊勢松坂の人。鈴廼屋と號した。享和元年(一八〇一)歿、年七十。

こに更に第四の特色としての「雄々しさ」を生ずる。日本人は寧ろ溫順な民族である。それが神々しさ卽ち一種の信念に驅られ、すがすがしい、執着のない、さつぱりした氣持に進むと、强い勇氣を生じて、身命を忘れるやうになる。明治天皇の御製に「敷島のやまと心のをゝしさは事ある時ぞあらはれにける」とあるのは、蓋し此の點を道破せられたものである。茲に吉田松陰の所謂「かくすれば斯くなるものと知りながらやむにやまれぬ大和だましひ」といふ雄々しい意氣が存する。天地正大の氣が粹然として神州に鍾まり、而して發して萬朶の櫻となつたものが、日本心の姿であるとすれば、凝つて百錬の日本刀となつたものは、正に日本魂の表現であるといへる。雄々しさの最高調に達した武士道の精髓が、至誠奉公の一念や敬神崇佛の信念と清廉潔白を重んずる淡泊とに在る

吉田松陰
幕末の志士。通稱寅次郎、名は矩方。長門の人。安政五年(一八五八)小塚原に斬られた。年三十。

天地正大氣。粹然鍾二神州一。秀爲二不二嶽一。巍々聳二千秋一。注爲二大瀛水一。洋々環二八洲一。發爲二萬朶櫻一。衆芳難二與儔一。凝爲二百錬鐵一。鋭利可レ斷レ蛟。（藤田東湖、正氣歌）

事は、其の本質が神々しさと清々しさとから來てゐるからである。

神々しさは又懷かしさと合體して、更に「みやび」(優雅)といふ情操を生ずる。「みやび」は日本心の第五の特色に數ふべきものであつて、理性と意志の偉人平田篤胤が天鈿女命を宮比神として、日本民族の情操の極致を此に求めたのは、全く卓見であり、意義深い說である。神々しい上品な氣持と、懷かしい溫みとが配合した時、そこに始めて「みやび」といふ高雅な情操が發生するのである。日本人の賞美する秋の七草は、正にこの「みやび」の具體化したものと見られる。

平田篤胤

懷かしさの情が清々しさの胸中に入るとき、そこに日本心の第

平田篤胤
江戸時代の國學者。氣吹屋と號した。羽後秋田の人。天保十三年(一八四二)歿、年六十八。

天鈿女命
女神。天照大神が天窟戸に入り給うた時、窟前に踊り諸神を哄笑させて大神を誘ひ出したといふ。

秋の七草
秋の野に咲きたる花をおよび折りかき數ふれば七種の花
萩が花尾花葛花なでしこの花をみなへし又藤袴あさがほの花(山上憶良)

六の特色として「おほらかさ」といふ心と態度とを生ずる。「おほらかさ」といふのは、小さい事に拘泥しない、こせ〳〵しない廣らかな氣宇である。天空海濶の氣分であり、大やうな心持である。古事記の神話はかういふ心で構成されてをり、「神風の伊勢の國は、常世の浪の重波打寄する國、傍國の阿怜國」と云はれる五十鈴川のほとりの皇大神宮は、かういふ心から奉齋されたのであらう。縹渺たる蒼海に包まれた海國日本の民族性には、又この「おほらかさ」の一特性がある。

日本文化は是等の特性の綜合であり、結晶である。その本質にはさう云ふ日本人の特色が籠つてゐる。而して神々しさと雄々しさとを中心として、他の特性が調和された文化には、澁味若しく は「さび」といふ特徵がある。能樂や、俳句や、茶道や、狩野派の繪畫や、

神風の伊勢國は
日本書紀の垂仁紀に天照大神が倭姫命に誨へ給うた御言葉として傳へられてある。

五十鈴川
伊勢度會郡大床山に發し皇大神宮の神域を過ぎて二見に至り海に注ぐ。

狩野派
日本畫の一派。明應頃正信に起り、其子元信に至つて絕世の大家と稱せられ、次第に盛となつた。

總じて武家以後の文化には此の特長が著しく含まれてゐる。次に懷かしさとみやびとを一聯とした情味を基本として、之に他の性情が攝取された場合には、そこに「ゆかしさ」といふ文化の特色が派生する。平安朝の文化や、和歌や、日本の多くの藝術が持つ特性である。更に又清々しさとおほらかさとを中心として、他の性情が包容されてゐる文化には、自らそこに一種の「氣品」といふ高尚な趣が發揮されるのである。皇居や、神社や、國寶的藝術などに感得される氣分である。

日本精神の正しい姿としての日本心には、かやうな種々の心理的特性が內在し、文化的特色が形成されてゐる。我が國民性の教養と國民精神の振興とには、須らく是等の貴重な情操の基礎を培養することを忘れてはならない。（日本精神發達史）

夏目漱石
名は金之助。東京の人。文學者。大正五年歿、年五十。

二　山路

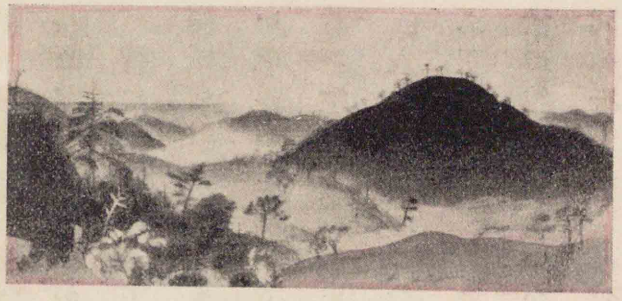
夏目漱石

山路を登りながらかう考へた。

智に動けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。住みにくさが高じると安い處へ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出來る。

人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向ふ三軒兩隣にちら〳〵する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行くばかりだ。人でなしの國は人の世よりも猶住みにくからう。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい處をどれ程か寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。住みにくき世から住みにくき煩ひを引拔いて、有難い世界をまのあたりに寫すのが詩である、畫である、或は音樂・彫刻である。細かにいへば、寫さないでもよい、只まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起る。丹青を畫架に向つて塗抹せ



春の山路（草枕繪卷）

んでも、五彩の絢爛は自ら眼に映る。只おのが住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに收め得れば足る。この故に、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なくとも、かく人生を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脫し得るの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得るの點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして明暗は表裏の如く、日のあたる所には屹度影がさすと悟つた。三十の今日はかう思うて居る。――喜の深きとき憂いよいよ深く、樂しみの大いなる程苦しみも大きい。之を切り放さうとすると身が持てぬ。片附けようとすれば世が立たぬ。金は大

事だ、大事なものが殖えれば寢る間も心配だらう。閣僚の肩は數百萬人の足を支へて居る。背中には重い天下がおぶさつて居る。うまい物も食はねば惜しい。少し食へば飽き足らぬ。存分食へばあとが不愉快だ。

忽ち足下で雲雀の聲がし出した。谷を見おろしたが、どこで鳴いてゐるか影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞える。せつせと忙しく鳴いてゐる。方幾里の空氣が、一面に蚤に刺されて、ゐたたまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を鳴き盡し、鳴きあかし、又鳴き暮さなければ氣が濟まんと見える。其の上どこまでも登つて行く、いつまでも登つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた擧句は、流れて雲に入つて漂うて居るうちに、形は消えて無くな

Percy Bysshe Shelley, 詩.

シェレー
英國の抒情詩人。
（西暦一七九二—一八二二）
前を見ては
雲雀に寄する賦。

We looke before and after
And pine for what is not:
Our sincerest laughter
with some pain is fraught;
Our sweetest songs are those that
tell of saddest thought.

つて、たゞ聲だけが空の裡に殘るのかも知れない。

春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體がなくなる。只菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を聞いた時に魂の在所が判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたものの中で、あれ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレーの詩を思ひ出して、口の内で覺えた所だけ諳誦して見たが、覺えてゐる所は二三句しかなかつた。

「前を見ては、後へを見ては、物欲しと憧るゝかな、われ。

腹からの笑ひといへど、苦しみの、そこにあるべし。

美しき極みの歌に、悲しさの極みの想ひ、籠るとぞ知る。」

成程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、一心不亂に前後を忘却して、我が喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩にも、よく萬斛の愁などいふ辭がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で濟むかも知れぬ。して見ると詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神經が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜もあらうが、無量の悲しみも多からう。それならば詩人になるのも考へものだ。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く積りになれば、微塵の苦もない。菜の花を見ても、只嬉しくて胸が躍るばかりだ。かう山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけでは別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥れて旨い物が食べられぬ位の事だらう。

然し苦しみのないのは何故だらう。只この景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貰つて開拓する氣にもならねば、鐵道を架けて一儲けする料簡も起らぬ。只この景色が――腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬ此の景色が、景色としてのみ余が心を樂しませつつあるから、苦勞も心配も伴はぬのであらう。自然の力は是に於てか尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩興に入らしむるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりするのは、人の世のつきものだ。余も三十年の間、それをし通してあきあきした。あきあきした上に芝居や小説で同じ刺激を繰返しては大變だ。余の欲

する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、少時でも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。どこ迄も世間を出ることの出來ぬのが其の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩の純粹なものも此の境を解脱することを知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じて居る。いくら詩的になつても地面の上を馳けあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。

嬉しいことに、東洋の詩歌にはそこを解脱したのがある。

採菊東籬下。　悠然見南山。

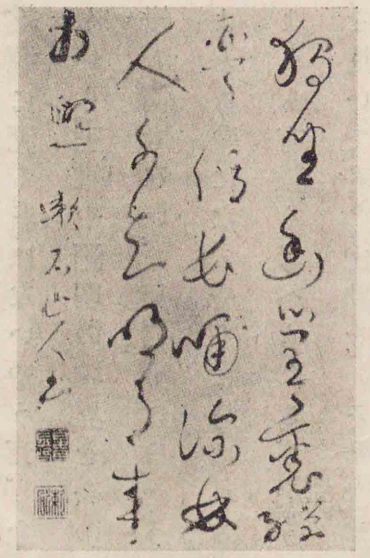
採菊云々　晉の陶淵明の詩。

南山　終南山の略。陝西省西安の南にある

たゞそれぎりの裏に、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出て來る。垣の向うに隣の人が覗いてるわけでもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐幽篁裏。　彈琴復長嘯。
深林人不知。　明月來相照。

只二十字のうちに、優に別乾坤を建立して居る。此の乾坤の功德は「不如歸」や「金色夜叉」の功德ではない。汽船・汽車・權利・義務・道德・禮儀で疲れ果てた後、凡てを忘却して、ぐつすりと寢込むやうな功德である。



漱石の筆蹟

獨坐云々　唐の王維の詩。

不如歸　德富蘆花の小説。

金色夜叉　尾崎紅葉の小説。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此の出世間的の詩味は大切である。惜しい事に、今の詩を作る人も詩を讀む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、わざ〳〵呑氣な扁舟を浮べて、此の桃源に溯る者はないやうだ。余は固より詩人を職業にして居らんから、王維や淵明の境界を今の世に布敎して廣げようと云ふ心掛も何もない。只自分には、かういふ感興が、演藝會よりも、舞踏會よりも、藥になるやうに思はれる。「ファウスト」よりも「ハムレット」よりも有難く考へられる。かうやつて只一人、繪具箱と三脚几とを擔いで、春の山路をのそ〳〵歩くのも、全く之が爲である。淵明・王維の詩境を直接に自然から吸收して、少しの間でも、非人情の天地に逍遙したいからの願。一つの醉興だ。（草枕）

ファウスト　獨逸の大文學者ゲーテの劇詩。

ハムレット　英國の大文學者シェクスピアの戯曲。

凡河内躬恒　醍醐天皇時代の歌人。古今集の撰者。

紀貫之　醍醐天皇時代の歌人。古今集の撰者。貫之筆蹟　前掲躬恒の歌を貫之が書いたものである。

素性法師　俗名良岑玄利。僧正遍昭の子。歌僧。

三　柳さくら

春の夜梅の花をよめる

春の夜のやみはあやなし梅の花
色こそ見えね香やはかくる〻

凡河内躬恒

郭公の鳴くを聞きてよめる

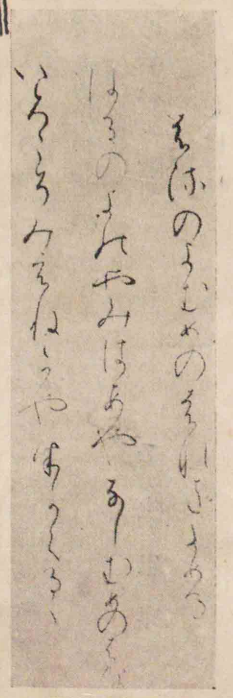
五月雨の
空もとゞろに時鳥
何をうしとか
夜たゞ鳴くらむ

紀貫之

花ざかりに京を見やりてよめる

見わたせば柳さくらをこきまぜて
みやこぞ春のにしきなりける

素性法師



紀貫之筆蹟

僧正遍昭
俗名は良岑宗貞。宇多天皇時代の歌僧。

是貞のみこ
是貞親王。光孝天皇の皇子。

壬生忠岑
醍醐天皇時代の歌人。古今集の撰者。

坂上是則
醍醐天皇時代の歌人。

蓮の露を見てよめる　僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もて
なにかは露を玉とあざむく

題しらず　讀人しらず

昨日こそ早苗とりしかいつの間に
稲葉そよぎてあきかぜの吹く

是貞のみこの家の歌合の歌　壬生忠岑

山里は秋こそことにわびしけれ
鹿のなくねに目をさましつゝ

大和の國にまかれりける時に雪のふりけるを見てよめる　坂上是則

朝ぼらけありあけの月と見るまでに
よし野のさとにふれるしら雪

わが君は
和漢朗詠集には「君が代は」とある。

小野篁
嵯峨天皇時代の漢學者。世に野相と稱せられる。

田村
文德天皇。京都府葛野郡田村陵。

在原行平
阿保親王の子。業平の兄。

古今和歌集
醍醐天皇の時代、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人が勅を奉じて撰した和歌の集。二十卷。

題しらず　讀人しらず

わが君は千代に八千代にさゞれ石の
いはほとなりてこけのむすまで

隱岐の國に流されける時に船にのりて出立つとて京なる人につかはしける　小野篁

わたの原八十島かけてこぎ出でぬと
人にはつげよあまのつりぶね

田村の御時に事にあたりて津の國の須磨といふ處にこもりはべりける時に宮のうちに侍りける人につかはしける　在原行平

わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に
もしほたれつゝわぶとこたへよ

（古今和歌集）

やまと歌は、人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけていひ出せるなり。花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。（古今和歌集序――紀貫之）

藤岡作太郎　號は東圃。金澤の人。文學博士。明治四十三年歿。年四十一。

四　我が國の繪畫

藤岡作太郎

日本畫と西洋畫とは漸次混融して、その區劃も明瞭ならざるに至るが如しといへども、この兩者の純粹なるものを比較すれば、各自の特色は尚甚だ顯著なり。啻に絹紙と彩具との相違のみならんや。その用意筆法等に於て皆然り。彼にあつては藝術は科學と並行し、理性は想像の銜となりて、遠近明暗、つとめて自然に背かざらんことを期し、此にあつては文化の精神的方面、獨りまづ進み、筆を揮ふもの感興に乘じて、腦裏の印象を瀉ぎ出す。彼は色彩を旨とし、此は描線を重んじ、彼は實相の通りに空氣の色をも漏らすことなく、此は主體の外は生地の儘に存す。一は濃艶、一は瀟洒、一は輪奐たる樓臺に顯官が客を引く如く、一は幽閑なる茅屋に高士が梅を愛するに似たり。これらの差別は、蓋し其の初よりして然りしにあらず、各自獨立したる歴史が漸次に養成したるものにして、今はた兩洋交通の歴史によりてこれを合一せんとする傾向あるなり。

我が國の文藝に於ける佛教の感化の甚深なることは、多言を要せず。眞の美術の歴史といふは聖德太子の佛教興隆に始り、爾來進歩劇甚、以て偉大なる奈良朝に及べり。されど此の時代も、彫塑に於てこそ千古無比の名を博すべけれ、繪畫の歩調は未だこれに伴はず、平安朝に巨勢金岡が出でし頃より、漸く丹青全盛の世は來れるなり。

法隆寺壁畫

巨勢金岡　光孝・宇多の諸帝に歴任した。歿年不詳。

而して奈良朝の彫塑がなべて佛像なるが如く、平安朝の繪畫も概して佛畫の外に出でず。按ふに平安朝の如く形式美を偏重した時代は、他に類例を見ず。佛教も亦形相の具足によりて、內心の

信仰に近づくべしとしたり。法成寺・法勝寺の如き、今廢墟をだに存せざれども、金堂・講堂、七寶莊嚴、天を摩する大塔、虹と曳く廻廊すべて一代の工を盡しし狀態は、歴史の傳ふるところ、今に存する鳳凰堂を見ても、その一端を窺ふべし。香煙徐ろに薫じて幢幡を掠め、蓮華頻りに散つて轉讀にたぐふ。龍頭の舟は池上に浮んで笙鼓月に冴え、頻伽の袖は庭前に飜りて舞容風に堪へず。恰もこれ

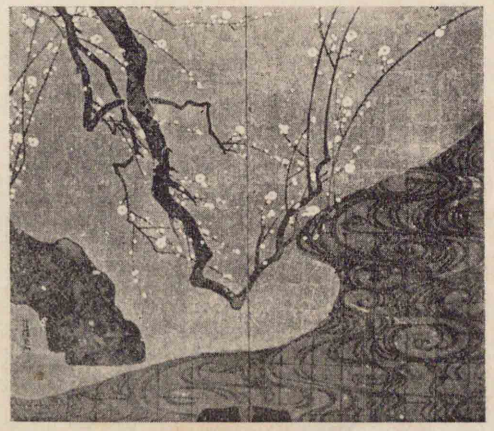
夏景山水（雪舟筆）

法成寺　京都京極土御門にある。藤原道長の創建に係る。後廢滅に歸した。

法勝寺　京都岡崎にある。白河天皇の創建。足利氏の末に廢滅した。

鳳凰堂　山城國宇治に在る。

坐ながらなる極樂淨土、紫雲の來迎を待たずして、身は既に汚濁世界を離る。かくの如き場に用ふる畫像なれば、彩華炫耀、丹碧映射、その色は珊瑚水晶を碎き、その線は黃金の箔を切り、或は慈悲圓滿、或は忿怒破邪、十分に濃く、あくまで鮮かに、精を窮め微を闡きて、後世の乾枯洒脫なるものとは全く撰を異にしたること、想見するに足れり。

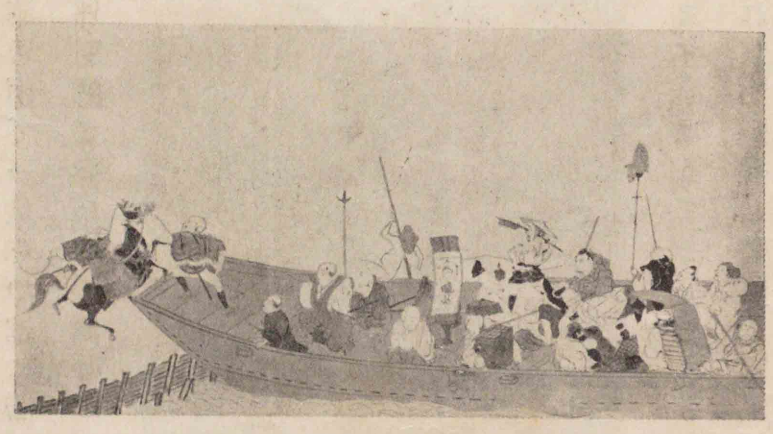


白梅圖屏風（尾形光琳筆）

鎌倉時代の繪卷物もまた日本繪畫の精華なり。平治物語繪卷等は源平鬪爭の慘狀を寫し、圓光大師畫傳等は新佛敎勃興の機運に從ふ。いづれも時代の反映にして、又不朽の逸品たるを失はざれど

平治物語繪卷　住吉慶恩が畫き藤原家隆が詞書したといふ。

圓光大師畫傳　土佐吉光が畫き伏見天皇外七家の詞書がある。



乘合舟（英一蝶筆）

も、內容外形共に根本の變化を受けたるは、實に東山時代の繪畫にして、僧雪舟その代表者たり。この革新は禪宗の提撕によりて成り、鎌倉時代にこの宗の傳來せしより漸く養ひ來れる勢力の、こゝに頂點に達したるものにして、香茶の技と榮枯を共にせり。

抑平安朝の佛寺を去つて禪刹の門を潛るや、彼此別天地の感なくんばあらず。結跏趺坐して寂靜の境に入れば、物の美醜も目を

雪舟　名は等楊。備中の人。畫僧。渡明して歸朝後山口の雲谷寺に住む。永正三年（一五〇六）歿、年八十七。

遮らず。一旦その道に悟入すれば經典佛像何の要かあらん。教外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。例へば能樂に何等の背景を設けずして、しかも能く雲煙萬里の情趣を偲ばしむるが如し。繪畫もこれに同じく、色を棄てゝ筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃して遠山を產み、禿筆數行にして樹石を刻む。一見すれば兒戲、熟視すれば神工、ますます味はうてます〳〵趣あり。恍惚として、吾、我を忘る。卽ちこれ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。

樵便圖（池大雅筆）

狩野　狩野正信に起り元信の大成した一派。

住吉　土佐派の一派。鎌倉時代の住吉慶恩に起るといふ。

光琳　尾形氏。京都の人。享保元年（三七六）歿。

一蝶　英氏。大阪の人。享保九年（三八四）歿。

菱川師宣　安房の人。號友竹。歿年は元祿七、八年の交といふ。

大雅　池氏。京都の人。安永五年（二四三六）歿。

桃山時代は豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫もやゝ移りて雄大穠麗の風を喜びしといへども、いまだ東山の根據を衝くに及ばざりき。江戸時代に至つて、幕府が消極の方針は、更に其の規模を縮めて枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴に誇れる狩野・住吉も先人の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、裝飾に傾ける光琳、滑稽の才ある一蝶あり、菱川師宣以來、浮世繪が時世粧を寫して、山水花鳥以外に題目を求めたるは、最も注意すべしと雖も、鄙俗に流れて、遂に高尚なる趣味に應ずる能はず。大雅等の文人畫は、東山の繪畫に比するに、全然別種のものに屬すれど、匠氣を忌み、

鯉（圓山應擧筆）

應擧　圓山氏。丹波の人。寛政七年（一七九五）歿。

訥言　田中氏。京都の人。文政六年（一八二三）歿。

容齋　菊池氏。名は武保。明治十一年歿、年九十一。

厨川白村　名は辰夫。英文學者。文學博士。大正十二年歿、年四十四。

形似を疎にし、氣韻生動を第一義とする所は卽ち相似たり。應擧等の寫生畫は自然の摸寫に力めて、別に一流を立てたるものなれども、また淸淡洒脫の習を脫するを得ず。訥言が創めたる土佐古風、容齋が好める歷史畫の如きは、卽ち學界に於ける國學の興隆に齊しく、また時勢の反響なり。但し此は彼の如き價値なきを憾とするのみ。一派又一派、各盛衰の數を免れざりしが、未だ其の間に崛起して斯道の根本的革新に成功せる者なく、かゝるうちに明治の昭代は來れり。

（東圃遺稿）

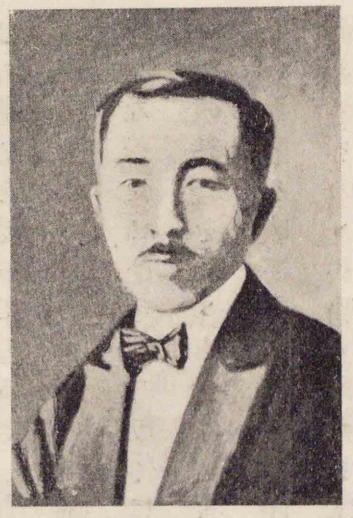
五　藝術の鑑賞

厨川白村

生命には普遍性があるかぎり、廣い意味の生命そのものが直ちに讀者と作家との間の共通共感性を構成し得るものであることは言ふまでもない。たとへば生命の最も著しい特徵の一つである律動の如き、それは如何なる場合にも必ず一人より他人へと傳はる性質を持つてゐる。一方でピヤノを彈ずれば、聾者にあらざる限は、聽者の方でも知らず識らずその音を聞いて、手拍子・足拍子を取る。たとひそれを動作に現さずとも、心の中で踊る。卽ちピヤノの鍵盤をたゝく音は、聽者の生命の中心を動かして、そこに新しい振動を喚び起す刺戟的暗示性を有してゐるからである。生命そのものゝ共鳴であり、共感である。

かくの如くにして讀者と作家との心境がぴつたり行き合つたところに生命の共鳴共感がある時、そこに藝術の鑑賞は成り立つ。だから讀者・觀客・聽衆が作家から受けるところのものは、他の科學

者や歴史家・哲學者などの所説に對する場合とちがつて、それは知識を得るのではない。象徴卽ち作品に現れた事象の刺戟力によつて、自分の生活内容を發見するのである。



厨川白村

藝術鑑賞の三昧境、又その法悦は、卽ちこの自己發見の喜に他ならない。象徴といふ刺戟性暗示性の媒介物を借りて、作者が表現しようとした自己の内生活を、讀者はまた自分の胸奥にも之と共鳴するものを見出した歡喜である。ちやうど睡魔に襲はれた時、我とわが手に自分の膝をつねつて、自分の生きて居ることを發見するのと同じやうに、人は文藝作品に接して自分の生きてゐるこ

とを感ずるのである。詳しく言へば、讀者みづから自己の「無意識」心理の中味を發見するのである。自分の魂の姿を詩人や藝術家が掲げた鏡の中に見出すのである。この鏡あることによつて、人は自分の生活内容をまざ〳〵と見ることが出來るのだ。同時にそれはまた、自分の生活内容を深くし、大きくし、豐かならしむる最好の機會を得るものである。

描かれたる事象は象徴に過ぎない、夢の外形に過ぎない。この象徴の刺戟あるによつて、始めて讀者と作家と兩方の「無意識」心理の内容、卽ち夢の潛在内容が共鳴し、共感する。そこに文藝作品から滲(にじ)み出で湧き出るところの實感味があるのだ。夢の潛在内容、それが卽ち人生の苦悶ではないか、世界の苦惱ではないか。

だから、文藝作品の與ふるところのものは、知識ではなくして喚

起作用である。讀者を刺戟して自己體驗の內容を自ら喚起せしめるものである。讀者がこの刺戟を受けて自ら燃えるのは、卽ちまた一種の創作に他ならないのである。作家が自分の生命を象徵によつて表現したとすれば、この象徵を通して讀者もまた自分の胸中に創作をしてゐるのである。作者の方が產出的創作をして居るとすれば、讀者はこれを受入れて自らまた共鳴的創作を爲すものである。この二重の創作あつてはじめて文藝の鑑賞は成るのだ。

かるが故に、抑壓を免れた絕對自由の創造生活を享有し得るものは、獨り作家ばかりではない。たゞ「人」として生きてゐる他の幾千萬、幾億萬の普通人も、亦作品の鑑賞によつて、作家と同じ創造生活の境地に完全に味到してゐるのである。この點から言へば、作

家と讀者との差は、自らこれを象徵化して表現すると然らざるとの別に過ぎない。換言すれば、文藝家は表現によつて創作をなし、讀者は喚起によつての創作をなす。われら讀者が大詩篇・大戲曲を鑑賞してゐる際の心狀は、ちやうど他人の踊るのを見、歌ふのを聽いてゐる時に、われらみづからは踊らずとも、歌はずとも、心の中で別に踊りもすれば歌ひもしてゐるのと全く同樣だ。その時それはもう他人の踊や歌ではなく、われらみづからの踊であり、歌であるのだ。詩歌を味はふとき、われらみづからも亦既に詩人であり、歌人である。作家と同じ創造創作の生活を營んで、抑壓作用から脫却した夢幻幻覺の境地に引入れられてゐるわけだ。引入れるだけの暗示作用をしたものが卽ち象徵である。

かくて鑑賞も亦一種の創作であるからには、そこに個性のはた

らきが根柢となつてゐることは言ふまでもない。即ち同一の作品から受ける感銘や印象も、また個人々々によつて異なるわけである。一つの象徴を通してそれから受入れる思想・感情・氣分などは、鑑賞者みづからの個性や體驗や生活内容によつて、人々の間に相違があらねばならぬ。批評を以て一種の創作なりとし、又創造的解釋なりと見做す印象批評は、即ちこの見地に立てるものである。

作家が描いた事象は象徴であるが故に、それから受ける感銘によつて、讀者は自分の内的生命に火を點じて自ら燃燒するのである。換言すれば、自分の體驗の内容をこれによつて發見し、創作家と同一の心境に味到することを得るのである。その體驗の内容を成してゐるものは、作家の場合と同じく、人間苦であり、社會苦であらねばならぬ。この苦悶、この心的傷害は、鑑賞者の無意識心理の中にも同じく沈滯として伏在して居たが故に、完全なる鑑賞即ち生命の共鳴共感がそこに成立するのである。

こゝに至つて、私は嘗て讀んだボードレールの散文詩に、私の言はんとするところを巧に譬喩した「窓」と題する一篇のあつたことを想ひ起す。

開けた窓の内部を外から見てゐる人は、閉ぢた窓を見てゐる人ほど多くのものを見ることは出來ない。蠟燭で明るくなつてゐる窓、それにも增して深みがあり、神祕的であり、夢幻的であり、陰暗であり、眩惑的であるものがまたとあらうか。煌々たる白日のもとに見得るものは、窓硝子の後に在るものよりはいつも興味の少いものである。あの黑くて明るい穴のなかに、生は

ボードレール　佛國ローマン派の詩人。（西暦一八二一―一八六七）

生き、生は夢み、生は惱んでゐるのだ。

波うてる屋根の彼方に中年の女が一人ゐる。もう皺が寄つて、貧乏で、いつも俯向いて何かしてゐる。外へも出ては行かない。その顏つき・着物・身振りから、また何といふ事はなしに、私はあの女の身の上、その來歷を想像して見た。そして時々それを自分で繰返して見ては泣くのである。

あれが若し女でなく、貧乏な老翁であつても、私はやはりその男の來歷をたやすく想像したであらう。

そして私は寢に就く自己以外の他人に於て私は生きもし惱みもしたことを得意に思つて。

君は恐らく云ふだらう、「そんな來歷が眞であると君は信じてゐるのか。」と。私以外の現實がどうあらうと構ひはしない。唯

私はこれによつて生き、自分が存在すると云ふこと、自分が如何なるものであるかと云ふこと、それを感じさへすればよい。（大意）

蠟燭の光に照された閉ぢた窓は作品である。そのなかに居る女の姿をちらと見て、讀者は自分の胸中に色々な創作をするのである。その窓、その女を通して、實は自分を發見してゐるのだ。自己以外の他人に於て自分は生きもし、惱みもしてゐるのだ。そして自分の存在と生活とを感じもし、味はひもしてゐるのだ。鑑賞とは卽ち彼のうちに我を發見し、我のうちに彼を見出すことである。（廚川白村全集）

幸田露伴
名は成行。東京の人。文學者。文學博士。

六　五重塔

幸田露伴

時は一月の末つ方、のつそり十兵衞が辛苦經營むなしからで、感

——五重塔（谷中天王寺）——

十兵衞　世話になつてゐる親方源太郎と張合つて塔を立てた大工。その擧動が遲鈍なところからのつそりと綽名せられた。

生雲塔　五重塔の名。

爲右衞門　感應寺の用人。

圓道　感應寺の役僧。

我等が賴む師　感應寺の住職圓朗上人。

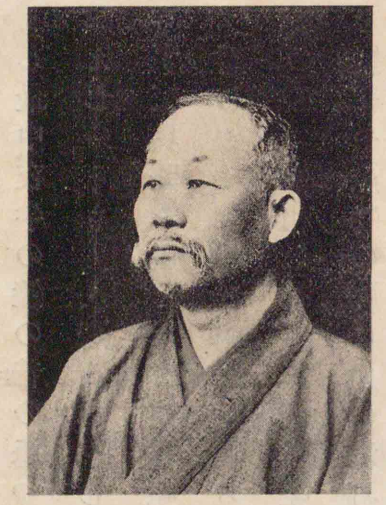
八宗・九宗　八宗は倶舍・成實・律・法相・三論・華嚴・天台・眞言をいひ、之に後の淨土又は禪を加へて九宗といふ。

芝山內　山內は增上寺のこと。芝にある。

應寺生雲塔いよ〳〵物の見事に出來上り、段々足場を取除けば、次第々々に露るゝ一階々々また一階、五重巍然と聳えしさま、金剛力士が魔軍を睥睨んで十六丈の姿を現じ、坤軸動がす足ぶみして巖に突立ちたるごとく、天晴れ立派に建つたる哉、あら快き細工振り哉、希有ぢや、未曾有ぢや、再あるまじ、と爲右衞門より門番迄も、初手のつそりを輕しめたる事は忘れて讃歎すれば、圓道はじめ一山の學徒も躍りあがつて喜び、「これでこそ感應寺の五重の塔なれ、あら嬉しや、我等が賴む師は當世に肩を比すべき人も無く、八宗・九宗の碩德達、虎豹鶴鷺と勝れたまへる中にも絶類拔群にて、譬へば獅子王・孔雀王。我等が賴む此の寺の塔も絶類拔群にて、奈良や京都はいさ知らず、上野・淺草・芝山內、江戸にて此の塔に勝るものなし、殊更塵土に埋もれて光も放たず終るべかりし男を拾ひ上げられて、心

世尊釋迦。

の寶珠の輝きを世に出されし師の美德、困苦に撓まず知己に酬いて、遂に仕遂げし十兵衞が賴しさ、おもしろくまた美はしき奇因緣なり、妙因緣なり、天の成せしか人の成せしか、將又諸天善神の蔭にて操り給ひしか。屋を造るに巧妙なりし達膩伽尊者の噂はあれど、世尊在世の御時にも如是快き事ありしを未だきかねば漢土にもきかず。いで落成の式あらば、われ偈を作らん、文を作らん、われ歌をよみ、詩をなして、頌せん讃せん詠ぜん記せん。」と、各〻互に語り合ひしは慾のみならぬ人間の情の、やさしくも亦殊勝なるに引替へて、測りがたきは天の意。圓道・爲右衞門二人が計らひとして、いと



幸田露伴

盛なる落成式執行の日も略定まり、其の日は貴賤男女の見物を許し、貧者に餘れる金を施し、十兵衛其の他を犒ひ賞する、一方にはまた伎樂を奏して、世に珍しき塔供養あるべき筈に支度とりぐ〳〵なりし最中、夜半の鐘の音の曇つて平日には似つかず耳にきたなく聞えしがそも〳〵、漸うあやしき風吹き出して、眠れる兒童も我知らず夜具踏み脱ぐほど時候生暖かくなるにつれ、雨戸のがたつく響烈しくなり勝り、闇に揉まるゝ松柏の梢に天魔の號び物凄くも、「人の心の平和を奪へ、浮世の榮華に誇れる奴等の瞻を破れや、睡りを攪せや、愚物の胸に血の濤打たせよ、僞物の面の紅き色奪れ、斧持てる者斧を揮へ、矛もてる者矛を揮へ、汝等が鋭き劍は餓ゑたり、汝等劍に食をあたへよ、人の膏血はよき食なり、汝等劍に飽くまで喰はせよ、飽くまで人の膏膩を餌へ。」と、號令きびしく發するや否、猛風

天魔　天子魔、或は天子業魔といふ。四魔の一。

一陣どつと起つて、斧をもつ夜叉、矛もてる夜叉、饑ゑたる劍もてる夜叉、皆一齊に暴れ出しぬ。

長夜の夢を覺されて、江戸四里四方の老若男女、惡風來たりと驚きさわぎ、「雨戸の横柄子緊乎と挿せ、辛張棒を強く張れ。」と家々ごとに狼狽ゆるを、可愍とも見ぬ飛天夜叉王、怒號の聲音たけ〴〵しく、「汝等人間を憚るな、汝等人間に憚られよ。人間は我等を輕んじたり、久しく我等を卑みたり、我等に捧ぐべき筈の定めの牲を忘れたり。這ふ代りとして立つて行く狗、驕奢の塒巣作れる禽、尻尾なき猿、物言ふ蛇、つゆ誠實なき狐の子、汚穢を知らざる豕の女、彼等に長く侮られて遂に何時まで忍び得ん。我等を長く侮らせて、彼等を何時まで誇らすべき。忍ぶべきだけ忍びたり、誇らすべきだけ誇

夜叉　印度の鬼神。

飛天夜叉王　夜叉士の一、車馬を以てよく天を飛行するといふ。

鐵圍山　須彌山を中心とせる諸山の最外圍。

らしたり。六十四年は既に過ぎたり、我等を縛せし機運の鐵鎖、我等を囚へし慈忍の岩窟は、我が神力にて扯斷り棄てたり、崩潰さしたり。汝等暴れよ、今こそ暴れよ、何十年の恨の毒氣を彼等に返せ、一時に返せ。彼等が驕慢の氣の臭さを鐵圍山外に攫んで捨てよ。彼等の頭を地につかしめよ。無慈悲の斧の及味の好さを彼等が胸に試みよ。慘酷の矛、瞋恚の劒の及糞と彼等をなし呉れよ。彼等が喉に氷を與へて苦寒に怖れ顫かしめよ。彼等が膽に針を與へて、秘密の痛みに堪へざらしめよ。彼等が眼前に彼等が生した る多數の奢侈の子孫を殺して玩物の念を嗟歎の灰の河に埋めよ。彼等は蠶の家を奪ひぬ、汝等彼等の家を奪へや。彼等は蠶の智慧を笑ひぬ、汝等彼等の智慧を讃せよ。すべて彼等の巧みとおもへる智慧を讃せよ、大と思へる意を讃せよ、美しと自ら思へる情を讃

せよ、協へりとなす理を讃せよ、剛しとなせる力を讃せよ、總ては我等の矛の餌なれば、劒の餌なれば、斧の餌なれば、讃して後に利器に餌ひ、よき餌をつくりし彼等を笑へ。嬲られるだけ彼等を嬲れ、急に屠るな、嬲り殺せ。活しながらに一枚々々皮を剝ぎ取れ、肉を剝ぎとれ。彼等が心臓を鞠として蹴よ。枳棘をもて背を鞭てよ。歎息の呼氣、涙の水、動悸の血の音、悲鳴の聲、其等を總て人間より取れ。殘忍の外快樂なし。酷烈ならずば汝等疾く死ね。暴れよ、進めよ、無法に住して放逸無慚、無理無體に暴れ立て暴れ立て、進め、進め、神とも戰へ、佛をも擲け。道理を壞つて壞り棄てなば、天下は我等がものなるぞ。」と叱咤するたび土石を飛ばして、丑の刻より寅の刻、卯となり辰となるまでも毫も止まず勵ましたつれば、數萬の眷屬勇みをなし、水を渡るは波を蹴かへし、陸を走るは沙を蹴かへし、

天地を塵埃に黄ばまして、日の光をもほと〳〵掩ひ、斧を揮つて數寄者が手入れ怠りなき松を冷笑ひつゝほつきと研るあり、矛を舞はして板屋根に忽ち穴を穿つもあり、ゆさ〳〵と怪力もて、さも堅固なる家を動かし橋を搖がす者もあり。「手ぬるし、手ぬるし、酷さが足らぬ、我に續け。」と憤怒の牙嚙み鳴らしつゝ、夜叉王の躍り上つて焦躁ば、虚空に充ち滿ちたる眷屬、雄叫鋭くをめき叫んで遮二無二暴威を揮ふ程に、神前寺内に立てる樹も、富家の庭に養はれし樹も、聲振り絞つて泣き悲み、見る〳〵大地の髪の毛は、恐怖に一一竪立なし、柳は倒れ竹は割るゝ折しも、黒雲空に流れて、樫の實よりも大きなる雨ばらり〳〵と降り出せば、得たりとます〳〵暴る夜叉、垣を引き捨て、塀を蹴倒し、門をもこはし、屋根をもめくり、軒端の瓦を踏み碎き、たゞ一揉みに屑屋を飛ばし、二揉み揉んでは二

階を捻ぢ取り、三たび揉んでは、某寺を物の見事に潰し崩し、どうどうどつと関をあぐる其の度毎に、心を冷し胸を騒がす人々の、彼に氣づかひ此に案ずる笑止の様を見ては喜び、居所さへも無くされて悲しむものを見ては喜び、いよ〳〵圖に乗り狼藉のあらん限を逞しうすれば、八百八町百萬の人みな生ける心地せず、顔色更にあらばこそ。中にも分けて驚きしは圓道・爲右衞門、折角僅かに出來上りし五重塔は、揉まれ揉まれて、九輪は動ぎ、頂上の寶珠は空に得讀めぬ字を書き、岩をも轉ばすべき風の突掛け來り、楯をも貫くべき雨の打付り來るたび撓む姿、木の軋る音、復る姿、又撓む姿、軋る音、今にも傾覆らんず様子に、「あれ〳〵危し、仕様はなきか、傾覆られては大事なり、止むる術もなき事か、雨さへ加はり來りし上、周圍に樹木もあらざれば、未曾有の風に、基礎狹くて丈のみ高き此の塔の堪

へん事いと覺束なし、本堂さへも斯程に動けば、塔は如何ばかりぞ、風を止むる呪文はきかぬか。かく恐ろしき大暴風雨に見舞に來べき源太は見えぬか、まだ新しき出入なりとて重々來では叶はざる十兵衞見えぬが寛怠なり。他さへ斯程氣づかふに、己が爲し塔氣にかけぬか。あれ〳〵危し、又撓んだわ。誰か十兵衞招びに行け。」とはいへ天に瓦飛び、板飛び、地上に砂利の舞ふ中を行かんといふものなく、漸く褒美の金に飽かして掃除人の七藏爺を出しやりぬ。

「さあ十兵衞、今度は是非に來よ。四の五のは云はせぬ、上人樣の御召ぢやぞ。」と七藏爺いきりきつて門口から我鳴れば、十兵衞聞くより身を起して、「なに、あの上人樣の御召なさるとか。七藏殿、それは眞實でござりますか。嗚呼、なさけない、何程風の強ければとて、

賴みきつたる上人樣までが、此の十兵衞の一心かけて建てたものを、脆くも壞るゝかのやうに思し召されたか口惜しい。世界に我を慈悲の眼で見て下さるゝ唯一つの神とも佛ともおもうて居た上人樣にも、眞底からは我が手腕たしかと思はれざりしか。つくづく賴母しげ無き世間、もう十兵衞の生甲斐なし。たま〳〵當時に雙なき尊き知識に知られしを、これ一生の面目と思うて空に悅びしも眞に果敢なき少時の夢。嵐の風のそよと吹けば、丹誠凝らせし彼の塔も倒れやせんと疑はるゝとは、えゝ腹の立つ、泣きたいやうな。それほど我は腑の無い奴か、恥をも知らぬ奴と見ゆるか。己が爲たる仕事が恥辱を受けても、のめ〳〵面押拭うて自己れは生きて居るやうな男と我は見らるゝか。例へば彼の塔倒れた時、生きて居ようか、生きたからうか、えゝ口惜しい、腹の立つ。嗚呼嗚

呼生命ももういらぬ。我が身體にも愛想の盡きた。此の世の中から見放された十兵衞は、生きて居るだけ恥辱をかく、苦惱を受ける。えゝ、いつその事、塔も倒れよ、暴風雨も此の上烈しくなれ。少しなりとも彼の塔に損じの出來て呉れよかし。空吹く風も、地打つ雨も、人間ほど我には情無からねば、塔壞されても倒されても悅びこそせめ、恨みはせじ。板一枚の吹きめくられ、釘一本の拔かるるとも、味氣なき世に未練はもたねば、物の見事に死んで退けて『十兵衞といふ愚魯漢は、己れが業の粗漏より恥辱を受けても生命惜しさに生き存へて居るやうな鄙劣な奴では無かりしか、かゝる心を有つて居しか。』と、せめては後にて弔はれん。一度はどうせ捨つる身の、捨處よし、捨時よし。佛寺を汚すは恐れあれど、我が建てしもの壞れしならば、其の場を一歩立去り得べきや。諸佛菩薩も御

許しあれ、生雲塔の頂上より直ちに飛んで身を捨てん。投ぐる五尺の皮囊は潰れて醜かるべきも、きたなきものを盛つては居らず。あはれ男兒の醇粹、清淨の血を流さんなれば、愍然ともこそ照覽あれ。』と、おもひし事やら思はざりしや、十兵衞自身も半分知らで、夢路を何時の間にか辿り、七藏にさへ何處でか分れて、此所は、おゝ、それ、その塔なり。

上りつめたる第五層の戸を押明けて、今しもぬつと十兵衞半身あらはせば、礫を投ぐるが如き暴雨の、眼も明けさせず面を打ち、一つ殘りし耳までも扯斷らんばかりに猛風の、呼吸さへさせず吹きかくるに、思はず一足退きしが、屈せず奮つて立出でつ。欄を握んで屹と睥めば、天は五月の闇より黑く、たゞ囂々たる風の音のみ宇宙に充ちて物騷がしく、さしも堅固の塔なれど、虛空に高く聳えた

一つ殘りし耳
前に源太の弟子に勘違をされて一つの耳は斬り取られた。

れば、どう〳〵どつと風の來る度ゆらめき動きて、荒浪の上に揉まるゝ棚無し小舟の、あはや覆らん風情。流石覺悟を極めたりしも、又今更に思はれて、一期の大事、死生の岐路と、八萬四千の身の毛を竪たせ、牙咬定めて眼を睜り、いざ其の時はと手にして來し六分鑿の柄、割るゝばかり引摑んでぞ、天命を靜かに待つとも知るや知らずや、風雨いとはず塔の周圍を幾度となく徘徊する怪しの男一人ありけり。

暴風雨のために準備狂ひし落成式もいよ〳〵濟みし日、上人わざわざ源太を召び給ひて、十兵衞と共に塔に上られ、心あつて雛僧に持たせられし御筆に墨汁したゝか含ませ、「われ此の塔に銘して得させん。十兵衞も見よ、源太も見よ。」と宣ひつゝ、「江都の住人十兵衞之を造り、川越源太郎之を成す。年月日。」とぞ筆太に記し了られ、滿面に笑を湛へて振返り給へば、兩人ともに言葉なく、たゞ平伏して拜みけるが、それより寶塔長へに天に聳えて、西より瞻れば、飛椽或時は素月を吐き、東より望めば、勾欄夕に紅日を呑んで、百有餘年の今になるまで、譚は活きて遺りける。（五重塔）

河井醉茗
名は又平、堺市の人、詩人。

七 塔影

河井醉茗

墨繩たゞす番匠が
掌の上に造られて。
朝、狹霧の晴れ行けば、
寶珠を天に捧げ持ち、
岸に聳ゆる五層塔。

藏めし經も蠹みて、
供養忘れし末の世の
雲を遮る勾欄に、
清き鉋の痕見れば、
塵に氣韻も殘るかな。

秋は露盤に露うけて、
扉は神祕に閉されぬ。
四天の神に守られて、
金輪際に根を埋め、
夜は北斗をうかゞへり。

四天の神
持國・增長・廣目・多聞の四天王。

家に住まざる山鳩の
巣くふに處得たればか、
虛空杳かに翔れども、
畫棟の朱の古びたる
浮圖を慕うて歸るらむ。

落暉は西に傾いて、
五重の屋根の歷々と、
重なりうつる草の上、
月は廂に浮び出でて、
九輪の影は水に在り。

雲の崖より吹落ちて、
風、湖を拭ひ去る、
波の面に刻まれし
藝術の花に咲き散らふ
時の力の遠きかな。

その世に媚びし歌反古は、
暦の嵐に破れたり。
生命の岸を下に見て、
天に呼吸する塔の
高き姿を水に見よ。

二荒芳德
愛媛縣の人。伯爵。貴族院議員。

八　日本の環境

二荒芳德

吾人は先づ自國を知らなければならぬ。今日の學者、政治家をはじめ、世のいはゆる識者は、わが日本が如何なる文化史上の地位を占めてゐるかに就ては、恐るべく無關心である。「自國自卑」の觀念に支配されてゐる輕佻浮薄な新思想家、「自國尊傲」の僻見に執着する頑迷固陋の國粹家は、一度、虚心坦懐の心持に立ち歸つて、自國の眞面目を看取しなければならぬ。この眞面目の無い所に、思想の不統一が現れ、思潮の混亂が生ずるのである。

予は今、日本の文化史上における地位を論ずる前に、先づ「文化とは何ぞや。」といふことを解決しておく必要がある。蓋し、今日「文化の語ほど濫用せられて、而もその意義の朦朧たるものはないであ

らう。

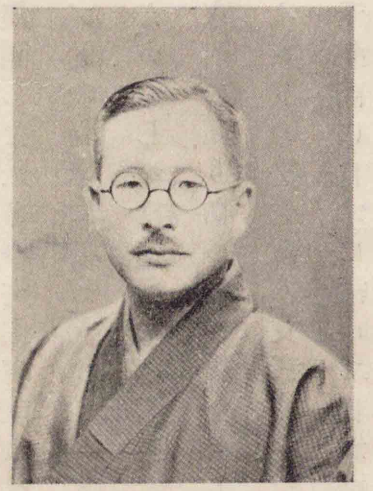
予は今「文化」といふ語を廣義に解して、そのうちに「文明」をも含むものとする。そして次の如く定義をする。「文化とは、人類がこの地球上に發生した當初より、その天賦にして人類に特有なる靈智靈能を傾注して、生成・化育・創造のために努力せる所產の累積的全部をいふ。」と。

そも〳〵我が日本の地位を明白に表明するためには、勢ひ「文化」の意義を正して取りかゝらなければならぬ。眞の「文化」の意義を知つてこそ、眞の日本國の尊嚴を知り得るのである。

今、この定義を分說するに、第一に「文化」なるものは人類のみの特有するものである。他の動物は「文化」を有せざること言ふまでも

ラヂオ
Radio.

ない。蜘蛛が網を張つて餌を得る事は、造物者の與へた方法であらうが、蜘蛛は百年前も今日も依然たる糧の網を張つてゐるに過ぎぬ。その他の動物も皆同樣である。然るに、ひとり人類に至つては、卽ち今年の生活は、昨年の生活に比して進步の跡を示してゐる。例へば數年前に、我々はラヂオを家庭に持たなかつた。今は家庭の多くがこれを利用してゐる。これは物質的文化の一例であるが、精神的文化の進步においてもまた同じである。かくして「文化」が人類にのみ特有なものであり、その特有なる所以は、人類が萬物の靈長として、靈智靈能を有してゐるのに基づく。


二荒芳德

かくして廣義の文化の歴史は、人類がこの地球上に發生したその當初――人類學者の説によれば、實に十數萬年の太古――より、その一ページを埋めてゐるのである。さうして、地球の數箇所に集團した是等の文化が、或はペルシヤ灣のほとりに榮え、或はエヂプトの北岸に榮え、或はインドの廣原に榮え、或は支那の大陸に榮え、いつしか相携へて東西二大文明を構成して、地球といふ渾球を東西に回り初めたのは、今より數千年前であつた。東するものにインドの文化あり、支那の文化あり。是等は遠きは神代、近くも一千年前に日本に渡つて日本文化に貢獻した。西するものにギリシヤ文化あり、ローマ文化あり。是等はスペイン・フランス等、歐洲中原を照して、遂に淼漫たる大西洋を越え、アメリカ大陸に渡り、その最も特長とする物質的方面を遺憾なく發揮した。蓋し東西二

大文化は、各〻その特長を有するといへども、いづれも人類がその本能により、天賦の力により、作り上げた努力の結晶である。而してこの東西に別れて相發足した二大文化が、圓い地球上の那邊で相會合するかは、たゞ神のみが知つてゐる謎であつたのだ。

然るに悠久數千年の經過は、遂にこの謎を解決した。さうして時か、命か、この二大文化は如實に目のあたり觀るが如く、東西の彩波の岸を洗ふこの日本において數十年前に相會したのである。この事たる、何人といへども誣ふる事の出來ぬ絶對莊嚴の人文歴史上の一大事實である。しかも、我等はこの二大文化を巧妙に融合せしめんと孜々として努力してゐる。かるが故に、わが國は想華において多色多種であると共に、文化の色彩において豐麗限りがない。疑ふものは一歩をアジア大陸に入れて、かの文化の成跡

を廣く展望せよ。その國固有の文化の中に、租界としての西洋文化の象徴を見るであらう。更に海を渡つてアメリカ大陸の岸に上つて見よ。そこには東洋文化の隻影だに認めることが出來ないであらう。

全體として東西文化を巧みに融合せしめ、各〻その所を得しめんと努めつゝあり、且得しめつゝある先進國は、わが國を措いて他に求められぬのである。しかも、日本がこの東西文化の會遇地點となつた事は、決してたゞ偶然のめぐり合せのみではない。時と、命と、これに人の和が加はつてゐる事を見逃してはならない。

それは明治時代の先覺者が、この西洋文化の宇宙的推移を早くも見拔いて、大膽に果斷にこれを攝受せんとし、且從來の東洋文化と巧みに融和せしむべき鋭い決心を有した事に起因してゐる。

もしも、この大英斷がなかつたならば、東西二大文化は、わが日本において今日見るが如くに、おの〳〵所を得た想華として開かなかつたであらう。さうして、この先覺者の先頭に立ち給うたのは、卽ち民族信念の熱烈なる實踐者たる明治天皇であらせられたのである。

歐洲の中原は少くとも既成の文化國である。完成の國である。アジアの大陸は將來の文化を植うべき廣漠たる國土である。アジア諸國は要するに未來の國である。希望の國である。この大陸と僅かに一衣帶水を隔つる日本は、如何なる態度を以てこの未來の國に對すべきであらうか。

更に遠く眼を擧げて東南の渺茫たる太平洋と、その對岸の南北

ラテン系　舊ローマ帝國を成した民族。アメリカに於てはメキシコ以南に住む者が多い。

アメリカの大陸を望め。そこには生氣潑剌たる新興のアメリカ人を見る。更生せんとするラテン系の諸民族を見る。四周いづれも年齒若き國民を友とする日本は、何よりも幸福であらねばならぬ。否、幸福を鄰邦と共に享受し得べき權利と義務とを有してゐるのだ。何といふ國家の慶福であらう。人、或は日本本國の土地狹小にして、民の饒多であることを嘆くけれども、これ國家の境を劃することを國民生活の信條とする國家的封建思想の餘弊である。そこに新しい意味の國家觀念が生ずる時、この問題には多大の解決可能性を與へ得ると信ずる。

（敢然頂角を行く）

十訓抄　三卷。和漢古今の教訓的説話二百五十餘條を十篇に分類し各篇首に序言を掲げてゐる。鎌倉時代の作であるが著者は明かでない。

九　十訓抄

一　心操

すべて人の振舞は、おもらかに言葉すくなにて、人をもならさず、人にもならされず、戯を好まず、おとなしくさしふるまひて居たれば、心の中は知らず、よきものかなと見えて、人にも恥ぢられ、ところをもおかるゝなり。かゝれども、これはなつかしく思はしき方にはあらず。たゞみだるべき所にはみだれ、折にしたがひては戯をもし、をかしき事をも笑ひ、人のなごりをも惜しみ、友にしたがふ心ありて、わりなく思はれぬるは德多かり。（可レ定二心操振舞一事）

二　憍慢

人の世にあるならひ、憍慢を先として、よく穩便なるは少し。或は、自由の方にて穩かならず。これは、わが涯分を料らず、さしもなき身を高くおもひあげて、主をも輕しめ、傍輩をもさぐるなり。或は、偏執の方にてかたくななり。これは、わが思ひたることをいみ

じうして、人のいふことを用ひざるなり。或は、世にかはれる振舞あり。これは、昔をのみいみじと思ひて、今の世にしたがはぬなり。或は、折節に似ぬをこあり。これは、内々よくなれにしかばと思ひて、はれに出でて人をならし、もしは、うちとけ遊ぶ所に交りて、われは未だ亂れぬまゝに、ことうるはしう紐さしかためて人をしらかし、その座をさますなり。

おほかた、かやうのことは、憍慢をもとして、心の小さきより起れり。これによりて、つひに生涯をうしなひ、後悔を深うす。かゝればたとひ、身をよしと安んじ、昔をいみじとしのび、物をおもしろしと思ふとも、人目をはゞかり世のそしりをつゝしみて、心に心をまかすまじきなり。されば、ある經には、「心の師とはなるとも、心を師とせざれ。」と說かれたりとかや。凡そ、貧しき者の諂はざるはあ

ある經に願作二心師一。不レ師二於心一。（涅槃經）

れども、富める者の驕らざるはかたければ、皆人の習なれども、身のいたりて、德の重からんにつけても、よくしづまりて穩かなるおもひをさきとすべし。（可レ離二憍慢一事）

三　人倫

人をあなづることは、しなかはれども必ずあることなり。或は貧しく賤しきをもあなづり、或は、不覺なるをもあなづり、或は、われよりさがれるをもあなづりて、することをもいふことをも、さばかりにこそと思へり。或は、親しみむつるゝを侮づり、おほかた、不運なるものをば、行ふ所のことがらよからぬやうに思ひ、いやしきものは、ふるまひとふるまふこと、いたづらごとと思へり。これは無智の人のあることなり。これによりて、いふまじき言をもいひ、すまじき業をも振舞ふほどに、侮るからにたはぶれして、想はざる外

の恥がましきことにもあひ、厭はるまじき者にも厭はれぬれば、人に輕く思ひけたれ、心劣りせらるゝなり。（不レ可レ侮二人倫一事）

四　多言

人は慮なく、言ふまじき事を口とく言ひ出し、人の短をそしり、したる事を難じ、かくす事を顯し、はぢがましき事をただす。これらはすべてあるまじきわざなり。われは何となく言ひ散らして思ひもいれぬ程に、言はるゝ人は思ひつめて、憤深くなりぬれば、はからざるに恥をも與へられ身の果つる程の大事にも及ぶなり。笑の中の劍はさらでだにも恐るべきものぞかし。又よくも心得ぬ事をあしざまに難じつれば、却りて身の不覺あらはるゝものなり。大方口輕きものになりぬれば、「某にその事なきかせそ。彼の者にな見せそ。」など云ひて、人に心をおかれ隔てらるゝ、口惜しかるべし。

笑の中の劍
李義甫容貌溫恭、與レ人語、必嬉怡微笑、而狡險忌克、故時人謂二義甫笑中有レ刀。（事類全書）

又人のつゝむ事のおのづから洩れ聞えたるにつけても、かれ話されしなど疑はれんは面目なかるべし。（可レ誡二人上多言等一事）

五　思慮

人々より合ひてさるべき遊などせんには、たとひ身にとりて安からずくちをしき事に遭ひたりとも、かまへて其の日のさはりあらじと計らふべきなり。「その人のありてしかぐ〳〵の折の事さめにき。」と言はるゝ、口惜しき事なり。しかれば行かぬ先より計らひ、惡しかるべき所へはさし出でぬには如かじ。もし惡しく計らひて交り居なん後は、おぼろげならぬ、身のいたづらになりぬべき程のきずなるべくば、事なきさまに言ひなし、たはぶれにもてなして、おとなしかるべきなり。況や我が使はん人のあやしからんために、今せがみさいなむ事、いとみぐるしかるべし。（可レ專二思慮一事）

阿佛尼　平度繁の女、藤原爲家の後室。阿佛は法名。

壁の中より　魯恭王使三人壞二夫子講堂一、於二壁中一得二古文孝經二十二章一。（古文孝經序）

一〇　いさよふ月

阿佛尼

むかし、壁の中より求め出でたりけん書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上の事とは知らざりけりな。水莖の岡の葛の葉、かへすがへすも書きおく跡たしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。また賢王の人をすて給はぬ政にもれ、忠臣の世を思ふ情にも捨てらるゝものは、數ならぬ身一つなりけりと思ひ知りながら、さてしもあらで、なほこの憂こそやるかたなく悲しけれ。

更に思ひつゞくれば、やまとうたの道は、たゞ誠すくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらん。日の本の國に、天の窟戸開けし時、よもの神だちの神樂の詞をはじめて、世を治め物を和ぐる

二たび勅をうけて　藤原爲家は寶治中、續後撰集を撰し、文永中、續古今集を撰した。

三人のをのこ　爲顯・爲相・爲守。

細川播州細川莊。

媒となりにけるこそ、この道の聖だちはしるしおかれたりける。

さても、また、集を撰ぶ人はためし多かれど、二たび勅をうけて、世世に聞えあげたる家は、たぐひ猶ありがたくやありけん。そのあとにしも携はりて、三人のをのこども、百千の歌の古ほぐどもを、いかなるえにかありけん、預りもたることあれど、「道を助けよ、子をはぐくめ、後の世をとへ。」とて、深き契をむすびおかれし細川の流も、故なくせきとめられしかば、後とふ法の燈も、道を守り家を助けん親子の命も、諸共にきえを爭ふ年月を經て、危く心細きものから、何としてつれなく今日まではながらふらん。惜しからぬ身一つは、やすく思ひすつ

阿佛尼

心の闇　人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな（藤原兼輔）

いざよふ月　建治三年（一二七七）十月十六日。

降りみ　神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬のはじめなりける（後撰集）

人やりならぬ道　人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りなん（古今集、源實）

侍從　爲相。

大夫　爲守。後出家して曉月といふ。

れども、子を思ふ心の闇は、なほ忍びがたく、道を顧みるうらみは、やらん方なく、さてもなほあづまの龜の鑑にうつさば曇らぬ影もやあらはるゝと、せめて思ひあまりて、よろづの憚を忘れ、身をえうなきものになし果てて、ゆくりもなく、いざよふ月にさそはれ出でなんとぞ思ひなりぬる。

頃は、み冬たつはじめの定めなき空なれば、降りみ降らずみ、時雨もたえず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙とともに亂れちりつゝ、事にふれて心ぼそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしとても、とゞまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。

目かれせざりつる程だに荒れまさりつる庭も籬も、ましてと見まはされて、慕はしげなる人々の袖の雫も慰めかねたる中にも、侍從・大夫などの、あながちにうち屈したるさまゝいと心苦しければ、さ

十六夜日記　阿佛尼の作。尼が京より鎌倉へ下つた時の旅行記。一卷。

駒牽き渡る　相阪の關の清水に影見えて今やひくらん望月の駒（拾遺集、紀貫之）

遊子　賈島の曉賦に「遊子猶行於殘月、函谷雞鳴。」（和漢朗詠集）

まざまいひこしらへぬ。

代々に書きおかれける歌の草子どもの奥書などして、あだならぬ限を選りしたゝめて、侍從の方へおくるとて、書きそへたる歌。

和歌の浦にかきとゞめたる藻鹽草
これをむかしのかたみとも見よ

あなかしこ横波かくなはまちどり
ひとかたならぬあとを思はば

（十六夜日記）

一一　東路の旅

東山の邊なる住家を出でて、逢阪の關打過ぐるほどに、駒牽き渡る望月の頃もやう〳〵近き空なれば、秋霧立ち渡りて、深き夜の月影かすかなり。木綿附鳥かすかに音づれて、遊子なほ殘月に行き

藁屋の床　世の中はとてもかくても過してん宮もわらやもはてしなければ（蟬丸の歌といふ）

打出の濱　粟津の原　共に滋賀縣滋賀郡にある。

けん、函谷の有樣思ひ合はせらる。昔、蟬丸といひける世捨人、この關の邊に、藁屋の床を結びて、常は琵琶を彈きて心をすまし、大和歌を詠じて懷を述べけり。

古の藁屋の床のあたりまで
こゝろをとむる逢阪の關

關山を過ぎぬれば打出の濱・粟津の原なんど聞けども、いまだ夜のうちなれば、さだかにも見えわかず。昔、天智天皇の御代、大和國飛鳥の岡本の宮より、近江の志賀の郡に都うつりありて、大津の宮を造られたりと聞くにも、このほどは舊き皇居の跡ぞかしとおぼえてあはれなり。

さゞなみや大津の宮のあれしより
名のみ殘れる滋賀のふるさと

滿誓沙彌　右大辨笠麻呂。養老五年出家。

漕ぎゆく舟　上句「世の中は何にたとへむ朝ぼらけ」（拾遺集）

野路　滋賀縣粟太郡老上村。

曙の空になりて瀨多の長橋うちわたすほどに、湖遙かにあらはれて、かの滿誓沙彌が、比叡山にてこの湖を望みつゝよめりけん歌思ひ出でられて、「漕ぎ行く舟のあとのしら浪」まことにはかなく心ぼそし。

世の中を漕ぎゆく舟に
よそへつゝ
眺めし跡を
またぞながむる

勢多の長橋（廣重筆）

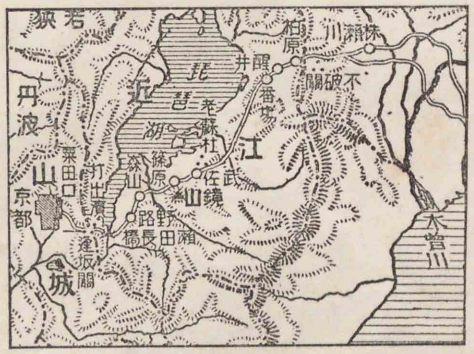
野路といふ處にいたりぬ。草の原露しげくして、旅衣いつしか袖の雫ところせし。

篠原
滋賀縣野洲郡。

南山の影
影浸ニ南山一青（クシテ）滉（クリ）瀁。（新撰朗詠集）

あづま路の野ぢの朝露けふやさは
袂にかゝるはじめなるらん

篠原といふ處を見れば、西東へ遙かに長き隄あり。北には里人住家を占め、南には池の面遠く見えわたる。むかひの汀、緑深き松のむらだち、波の色も一つになり、南山の影をひたさねども、青くして滉瀁たり。洲崎處々に入りちがひて、葦・かつみなど生ひわたれる中に、鴛・鴨の打群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。昔、都を立つ旅人、この宿にこそ泊りけるが、今は打過ぐる類のみ多くして、家居もまばらになり行くなど聞くこそ、變り行く



近江附近

飛鳥の河
世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬になる（古今集、讀人しらず）

鏡の宿
滋賀縣蒲生郡。

なゝの翁の云々
老人七人を主賓として催す尚齒會。承安二年、藤原清輔が催した時の事。

鏡山の歌
古今集雜に出で、註に「或人いはく、大伴黒主がなり」とある。

しらぬおきな
増鏡そこなる影にむかひゐて見る時にこそしらぬ翁に逢ふ心地すれ（拾遺集、旋頭歌）

武佐寺
滋賀縣蒲生郡武佐村長光寺。

世の習、飛鳥の河の淵瀬には限らざりけめと覺ゆ。

行く人もとまらぬ里となりしより
あれのみまさる野路の篠原

鏡の宿に至りぬれば、昔なゝの翁のよりあひつゝ、老を厭ひてよみける歌の中に、「鏡山いざ立ちよりて見てゆかん年へぬる身は老いやしぬると」といへるは、この山の事にやとおぼえて、宿もからまほしく覺えけれども、なほおくざまに訪ふべきところありて打過ぎぬ。

たち寄らでけふは過ぎなん鏡山
しらぬおきなの影は見ずとも

行き暮れぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに宿りぬ。まばらなる床の秋風、夜ふくるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きか

へたる心地す。枕に近き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊の草の庵の寢覺も、かくやありけんと哀なり。行末遠き旅の空思ひ續けられて、いといたう物悲し。

都出でて幾日もあらぬ今宵だに
かたしきわびぬとこの秋風

音に聞きし醒ケ井を見れば、陰くらき木の岩根より流れ出づる清水、あたり涼しきまで澄渡りて、げに身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、往還の旅人多く立寄りて涼み合へり。かの西行が「道のべに清水流るゝ柳蔭、しばしとてこそ立ちとまりつれ」と詠めるも、かやうの處にや。

道のべの木蔭の清水むすぶとて
しばし涼まぬ旅人ぞなき

遺愛寺
香爐峰下にある。白樂天の山居に近い處。
遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峰雪撥レ簾看。（白氏文集）

醒ケ井
滋賀縣阪田郡醒井村。

西行が歌
新古今集夏の部に題不知とある。

柏原
滋賀縣阪田郡柏原村。

關山
岐阜縣不破郡關原村にある不破の關。

後京極
藤原良經。

荒れにし
上句「人すまぬ不破の關屋の板庇」（新古今集）

株瀨川
岐阜縣不破郡にあつた。今の呂久川がその蹟であらうといふ。

照る月なみ
水のおもに照る月なみか數ふればこよひぞ秋のもなかなりける（拾遺集、源順）

二千里の外
三五夜中新月色。二千里外故人心。（和漢朗詠集）

柏原といふ處を立ちて美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底に音づれ、山風松の梢にしぐれ渡りて、日影も見えぬ木の下道、あはれに心細し。越えはてぬれば、不破の關屋なり。萱屋の板庇年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の「荒れにし後はたゞ秋の風」とよませ給へる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらし難ければ、鄙しき言の葉を殘さんもなか〳〵に覺えて、此處をば空しく打過ぎぬ。

株瀨川といふ處に泊りて、夜更くる程に川端に立出でて見れば、秋の最中の晴天、清き川瀨にうつろひて、照る月なみも數見ゆるばかりに澄みわたれり。二千里の外の故人の心遠く思ひやられて、旅の思いとゞ抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、「花洛を出でて三日、株瀨川に宿して一宵、しば〳〵幽吟を中秋三五夜の月に

傷ましめ、かつ〳〵遠情を前途一千里の雲に送る。」など、或家の障子に書附くるついでに、

知らざりき秋の半ばの今宵しも
かゝる旅寢の月を見んとは　（東關紀行）

東關紀行　京都より鎌倉に至る紀行文。源親行の作といふ。一卷。

田部重治　富山縣の人。英文學者。法政大學教授。

一二　高原

田部重治

私は高原を好む。山岳は絶えず自らを超越しようとする努力の、また、鬪ひの氣分の象徴であるとすれば、高原は、それを一歩靜觀的ならしめると共に、人間世界のじめ〳〵した實際界を想像の世界に引上げて、最も瞑想的な世界を創造する氣分のそれである。或意味に於て、高原は現實と理想との最もよい調和を見出し得る現實世界の綠地である。

私は高原に立つて、其の平和な希望に充つる心持を體驗する。終日の旅に疲れた旅客が、平和に身體を横へる宿の烟を峠の下に遠望するやうな、平和な希望に富む心持を體驗する。又時としては、嘗て淺間の裾野に雲の蔽うてゐたやうな、哀愁に滿つるはかないロマンティックな氣分をすらも抱く。そしてまた瞑想しながら通つた八ヶ岳や富士の裾野の悠々たる廣場に、のび〳〵とした自らを浮べ、自らを整頓する氣持をも體驗する。併し何れにしても高原の氣分は沈靜的である、情操的である、生活の音樂である。

かうした氣持を抱くことがロマンティックであり、それが山に登る人に取つて不必要であり、又それが登山者でない事の證據であると云ふ人があれば、それは登山といふものを人間生活以外に閉め出すことであり、或意味に於て、それに人間性を認めないこと

ロマンティック　Romantic. 浪漫的。空想的。傳奇的。

であらう。高原は私達をして最も純粹なる自己の姿に於て自然を觀照せしめ、それと融合せしめる。柔いものゝ內に强いものを體驗せしめる。さういふものを含む高原の觀照は、絕えざる努力であり鬪ひであるやうに見える登山とは、慥かに外面的には異なつてゐる場合もあり得る。

しかし登山の價値は必ずしも肉體的な鬪ひや動くことにのみ存するのではない。若し高原に於て、登山に於けると同じ歡喜を體驗し、同じく無我の境地に入ることが出來れば、そこには其の內容的價値に於て、何等の上下はないわけである。外面的により多く動くことにのみ價値を多く認めなければならないとすれば、登山の際の駈足が步行よりも價値があり、人間の登山よりも動物の山を行くことに遙かに價値が見出されなければならないであらう。價値の內容は內面的な問題でなければならない。それは登山者の生命が、どの位眞劍に登山と內面的にしつくり一致してゐるかといふことにのみ存してゐる。

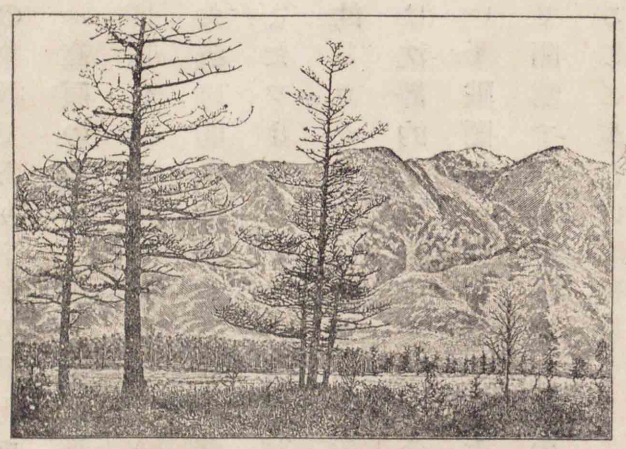
さういふ意味に於て、私は高原に於て歡喜を感ずること、また峠に於てそれを感ずることは、登山に於けるとは異ならないことを感じてゐる。また溪谷に於ても、それを感じ、時としては平原に於てすらもそれを感ずる。換言すれば、私は總ての美はしき自然に對してそれを感ずる。若しも行爲する人が自らの個性を打込み得るものでさへあれば、其の內容的價値に於て、それは登山と等しく、最も價値ある生活に外ならないと私は信ずる。

私達の生活に於て最も價値あることは、その創造に外ならない。その創造とは、摸倣的でない生活による自己の體驗に外ならない。

最も信念に富み、自己を僞らない行爲より來る自己の體驗に外ならない。或人はそれを科學的發見に見出すであらう。或人はそれを森林の瞑想的な生活の體驗に見出すであらう。或人はそれを動物や昆蟲の生活を觀察することに見出すであらう。或人は外部的に見て最も價値少いと見られるものの體驗に見出すであらう。要するに價値の內容は、その人の個性と、その個性が自らを投じ得ると信ずる對象との融合によつて作られる。斯くの如き事實を否定することは、人生の重大なる事實を否定するものであり、人生を空疎にするものである。

高原に於て無上の歡喜を體驗し、そこに自らの開放を完全に體得し得ることは、等しく自己創造をもつことでなければならない。私達は僅かな時間によつてすらも、自己の充實を體驗することの

出來る對象を見出し得れば、そこに自己創造を獲得することが出來る。そこに私達は自己の改造を體驗し、向上を實現する。



戰場ヶ原

高原の美を形づくるものは、それが與ふる眺望と高原それ自身の與ふる美とでなければならないことは、峠に於けると同じである。しかしそれは峠に於けるほど複雜な意義を持つものではない。そこには何等の矛盾もなければ、功利的意義も持つてゐない。飽くまでそれ自身のゆつたりした、矛盾のない面影を持つてゐる

意味に於て、それは或程度に於て、形式と内容との一致を持ち、調和の象徴であり、平和の權化である。

高原の與ふる感情は沈靜的である。沈靜的であるだけ、それだけ、それは亢奮的といふよりも瞑想的である。アミエルの體驗した汎神的な統一的な宇宙觀、沈靜より生ずる無我の境地を與ふる。またワーヅワースの情操が與ふるやうな境地を體驗せしめ、狂熱的なロマンティックな詩人の與ふるそれとは異つてゐる。そこには沈靜的な瞑想的要素がある故に、時には感傷的な氣分を抱き易い。戰鬪的氣分がなく、なごやかにのびのびしてゐるが故に、平和で開豁で、最も自己自身との統一を感じて、矛盾の不統一を體驗することがない。

高原を想ふ時、一つの概念として浮ぶそれは、いつもたゞのびのびとしたものの寛やかなうねりに止まる。しかし事實に於ける私達の求める高原は、多くは山岳の重疊した間に介在するそれである。其の意味に於て、私達が日本に於て高原を求めることは、登山すると異ならない肉體の運動の體驗となる。汽車を降りて淺間の裾野のやうなところを彷徨する場合は別として、多くは交通不便な地方にあり、ここへ達するには多くの峠や山を越えなければならない。卽ち私達は日本の高原を行くことに於て、登山すると同じものを體驗し、場合によつては登山以上の崇高なるものを體驗することが出來る。從つてそこには鬪ひが全然ないとは云へない、努力がないとは云へない。全人格的な融合を靈的にも肉體的にも體驗することが出來る。

斯くして來るものは何であらうか。絶えざる自己の超越の努

アミエル　瑞西ジュネーヴの作家。詩集・評論集などの著が多い。（西暦一八二一―一八八一）

ワーヅワース　英吉利浪漫派の代表的詩人。（西暦一七七〇―一八五〇）

力と、而もまた、それを靜觀し、それを自らに統一する沈靜的な感情の獲得である。それを得ることが高原を行くものに取つて、少くも日本の高原を行くものに取つての喜びでなければならない。

そして高原は最も多く峠と結びついてゐる。峠道が高原と結びつくことに於て、それは峠道を和やかにし、峠行を容易ならしめると共に、峠を美化することにも與つて力がある。それは旅客をして功利的な目的の爲めに前途を急がせる中にも、悠々とした氣分を抱かせ、自然を鑑賞する機會を與へる。

（峠と高原）

一三　俚諺論

大西祝

一國民の言ひなれたる俚諺の內容を深く研究すれば、其の國民の歷史・氣質・風俗・人情・學術・宗教・社會制度等、其の一切の生活と其の

大西祝
操山と號する、岡山の人。哲學者、文學博士。明治三十二年歿、年三十六。

生活の理想とに就いて發見する所多々あるべし。「花は櫻木、人は武士。」といふ美しき諺は言ふも更なり、「武士は食はねど高楊枝。」「武士は相見互。」といふが如きは、我が國の歷史に大光彩を放てる武士といふ階級の理想を窺ふに足るべく、又之によりて、かゝる理想を愛重したりし全國民の氣風を察し得べし。「泣く子と地頭には勝たれぬ。」といふを見ば、千萬言の歷史的敍述に劣らず、我が國の歷史の或時代に於ける地頭といふ者の勢力の如何なりしかを察知し得べく、「女に家なし。」「貞女は兩夫に見えず。」といふなどは、我が國に固有なる諺といふべかりざれども、亦以て婦女子に關する我が社

大西祝

女に家なし
婦人有三三從之義一、無二專一之道一、故未レ嫁從レ父、既嫁從レ夫、夫死從レ長子。（儀禮）

貞女は
忠臣不レ事二二君一、
貞婦不レ更二二夫一。（史記）

會制度の一面を窺ふに足るべく、「嫁が姑になる。」「老いては子に從へ。」といへば、我が國の家族制度を示す所あり。「さはらぬ神に崇なし。」「棄てる神あれば助ける神あり。」「神は正直の頭にやどる。」「苦しい時の神だのみ。」などは、宗教思想を示すべく、「袖ふり合ふも他生の縁。」といへば、以て佛教によりて注入せられたる因果思想を見るに足るべし。

歐洲諸國の諺には、夫婦の關係をいへるもの甚だ多く、我が國にては、寧ろ親子の關係をいへるもの多きが如し。「親の心、子知らず。」「子を知るもの親に若くはなし。」「子ゆゑの闇に迷ふ。」「孝行をしたい時分に親はなし。」「可愛い子には旅をさせよ。」「子は三界の首枷。」「子が思ふよりは、親は百倍も思ふ。」といふなど、親の慈をいふや至れり盡せり。その上に「子よりも孫は可愛い。」といへる、何の言かこれにまさりて孫の愛の濃かなることを發表するものぞ。かく親の慈愛を稱ふるものから、俚諺はまた能く人情の他面をいふ。「子を棄つる藪はあれど、身を棄つる藪なし。」とは、よくも吾人の主我心を言ひ穿てるものと謂ふべし。

一般の人情に自利の念ほど強きはなかるべし。俚諺の如何に多くが損得の念を主とせるものなるかを見よ。而して其の中に、如何によく普通の人情を穿てるものあるかを見よ。「下さるものは夏も御小袖。」「かたきの家にても口をぬらせ。」「ころんでも唯は起きぬ。」「泣く子も目を見る。」「まことに然り、泣く子すら自身を護るには油斷せざるなり。「油斷大敵。」「小を棄てて大に就け。」「長いものには卷かれよ。」「曲らねば世に立たれず。」などいづれか利益の念を主とせざる。聖人は「知らざるを知らずとせよ。」といひ、俚諺は「知

聖人は
子曰、知レ之爲レ知レ之、不レ知爲レ不レ知。是知也。（論語）

つて知らざれ。」といふ。「鷹は死すとも穂をつまず。」など氣概を稱揚するもあれど、俚諺の大體の教訓は「賢かれ、損をすな。」といふにあり。

俚諺は事の一面を見てこれを誇張して言ふ傾あるものから、其の他面をいふに躊躇せざるが故に、一見其の判斷の相反するがごとく思はるゝものあれど、かく兩面よりいふ所、よく世態人情の實相にかなひて、其の判斷概ね公平なり。「すきこそ物の上手なれ。」といへど、「下手の横ずき。」といふを忘れず。「親に似ぬは鬼子。」といへば、「形生めども心は生まず。」といふ。かく事の兩面を叩いて世相の内祕、人情の裏面を穿たんと力むる、これ卽ち俚諺が警戒と諷刺とに富める所以にして、中には一言よく人情の裏面を訐きて、巧に罵倒し了するものあり。

我が國の俚諺は、他國の俚諺に比して其の性質及び價値如何。

これらの問題を考ふる前には、まづ我が國の俚諺を採集せざるべからず。予輩は早く適當なる準備を具へたる人が、此の事に手を着けんことを切望せざるを得ず。（大西博士全集）

○

船頭多くして船山に上る。

手柄立せんより下知に違ふな。

たつ鳥、跡を濁さず。

雨降つて地固まる。

をかめ八目。

佛造つて魂入れず。

難波の蘆は伊勢の濱荻。

二階から目藥。

竹田出雲　大阪の人。戯曲作者。寶暦六年（一七五六）歿、年六十六。
春藤玄馬　藤原時平の臣。
首　菅公の子菅秀才の首。
松王丸　梅王丸及櫻丸の兄。道眞に背いて時平の舍人となる。
村の者　村は大原の奥、芹生の里。
菅秀才　菅原道眞の一子、當年八歳。

猫に小判。
急がば廻れ。

一四　寺小屋

竹田出雲

かゝる所へ春藤玄蕃、首見る役は松王丸、病苦を助くる駕乘物、門口に舁きすうれば、後には大勢村の者、附き隨うて、「申上げます。皆是に居る者の子供が、手習に參つて居ります。若し取違へ首討たれては、取返しが成りませぬ。どうぞおもどし下され。」と願へば、玄蕃「やあ、喧しい蠅蟲めら。うぬらが小悴の事まで、身どもが知つたことか。勝手次第に連れうせう。」と叱りつくれば、松王丸「やれ、お待ちなされ。暫く。」と、駕より出づるも刀を杖、「憚りながら、彼等とても油斷ならぬ。病中ながら拙者めが、檢分の役勤むるも、外には菅秀

菅丞相　右大臣菅原道眞。
夫婦　武部源藏と妻戸浪。源藏は菅原道眞の臣で、書道の秘事を授けられた。

才の顔見知る者なき故、今日の役目しおほすれば、病身の願ひ御暇下さるべしと有難き御意の趣、疎かには致されず。菅丞相の所縁の者、此の村に置くからは、百姓共もぐるになつて、銘々が悴に仕立て、助けてかへる手も有ること、こりや、やい、百姓めら、ざわ〳〵こぬかさずとも、一人づつ呼出せ。面改めてもどしてくりよ。」と、のつ引きさせぬ釘鎹、打てばひゞけの内には夫婦、豫て覺悟も今更に、胸轟かすばかりなり。

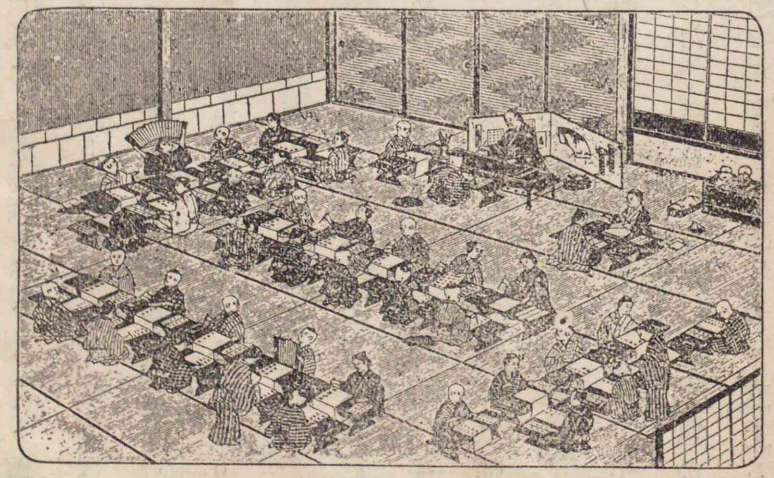
竹田出雲

表はそれとも白髮の親仁、門口より聲高に、「長松よ〳〵。」と呼出せば、「おつ」と答へて出でくるは、腕白顔に墨べつたり、似ても似つかぬ

木みしり茄子
木搖茄子。枝より早く搖り取つた小茄子。
嫁にも云々
秋茄子嫁にくはすな（諺草）

雪と墨、是ではないと赦しやる。「岩松は居らぬか。」と呼ぶ顏に、「祖父様、何ぢや。」とはしこくて、出でくる子供の頑是なき顏は丸顏、木みしり茄子。「詮議に及ばぬ、連れうせう。」と睨め付けられ、「おゝこはや。嫁にもくはさぬ此の孫を、命の花落遁れし。」と、祖父が抱へて走り行く。次は十五の涎くり、「ぼんよ、ぼんよ。」と親父が手招き、「とゝよ、己はもうこゝから抱かれていの。」と、あまえる顏は馬顏で、聲蚤。「お、泣くな、抱いてやらう。」と干鮭を猫なで親が銜へ行く。「私が悴は器量よし。お見違へ下さるな。」と斷りいうて呼出すは、色白々と爪實顏、此奴胡亂と引つ捕へ、見れば首筋眞黑々、墨か痣かは知らねども、此奴でないと突放す。其の外山家・奥在所の、子供殘らず呼び出して、見せても似ぬこそ道理、土が產ました計芋、子ばかりよつて立歸る。すは身の上と、源藏も、妻の戸浪も胸を据ゑ、待つ間程なく入來る兩

人、「やあ源藏、この玄蕃が目の前で、討つて渡すと請合つた菅秀才の首、さあ請取らう。早く渡せ。」と手詰の催促、ちつとも臆せず、「かりそめならぬ右大臣の若君、搔首捻首にも致されず。暫くは御用捨。」と立上るを、松王丸「やあ、其の手はくはぬ。暫しの用捨と隙どらせ、逃支度しても、裏道へは數百人をつけ置き、蟻の這出る所もない。生顏と死顏は、相格が變るなどゝ、身替りの贋首、犬もたべぬ。古手な



寺　小　屋

ことして後悔すな。」といはれてぐつとせき上げ「やあ、いらざる馬鹿念。病みほうけた汝が目玉がでんぐり返り、逆様眼で見ようはしらず、紛れもなき菅秀才の首、追つ付け見せう。」「おゝ其の舌の根の乾かぬ内に、早く討て。とく切れ。」と玄蕃が權柄。はつとばかりに源藏は、胸を据ゑてぞ入りにける。

傍に聞き居る女房は、こゝぞ大事と心も空、檢使は四方八方に眼を配る中にも、松王机文庫の數を見廻し「やあ、合點の行かぬ。先だつていんだ小忰等は以上八人、机の數が一脚多い。其の忰は何處に居るぞ。」と見咎められて、戸浪ははつと「いや、こりや、けふ始めて寺、いや寺參りした子がござんす。」「何馬鹿な。」「おゝそれ〳〵、是が卽ち菅秀才のお机文庫。」と、木地を隱した塗机、さつとさばいて言ひ拔ける。「何にもせよ、隙とらすが油斷の元。」と、玄蕃諸共つゝ立上る。

檢使　春藤玄蕃。

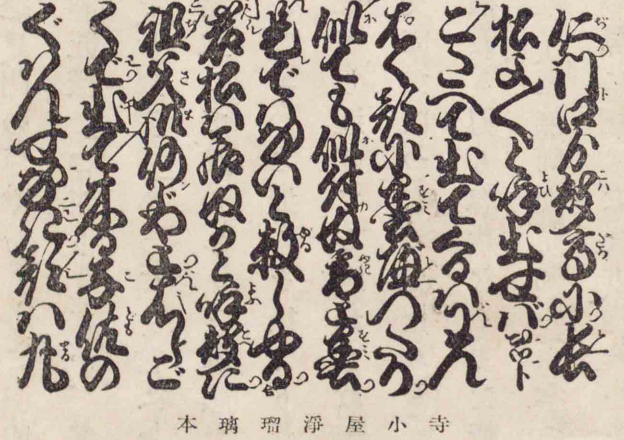
こなたは手詰、命の瀨戸際、奥にはばつたり首討つ音、はつと女房胸を抱き、ふん込む足もけしとむうち、武部源藏白臺に、首桶載せてしづ〳〵出で、目通りにさし置き、「是非に及ばず、菅秀才の御首討ち奉る。いはば大切ない御首、性根をすゑて、さあ松王丸、しつかり檢分せよ。」と忍びの鍔元くつろげて、虚といはゞ切りつけん、實と云はゞ助けんと、固唾を呑んで控へ居る。「はゝゝゝ、何のこれしき、性根どころか。今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄極樂の境、家來衆、源藏夫婦を取卷きめされ。」「畏まつた。」と捕手の人數、十手振つて立蒐る。女房戸浪も身を固め、夫は元より一生懸命「さあ實檢せよ、檢分。」といふ一言も命がけ、後は捕手、向ふは曲者、玄蕃は始終眼を配り、こゝぞ絶對絶命と思ふうち、はや首桶引寄せ、蓋引明けた首は小太郎、贋というたら一討とはや拔きかける。戸浪は祈願「天道樣、佛神

小太郎　松王の子。

若君　菅秀才。

様、憐れみ給へ。」と女の念力。眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て、「むう、こりや菅秀才の首討つたは紛ひなし、相違なし。」といふにも恂り源藏夫婦、傍りきよろ〳〵見合はせたり。檢使の玄蕃は、檢分の詞證據に、「出かした、出かした、よく討つた。褒美にはかくまうた罪科赦してくれる。いざ松王丸、片時も早く時平公へお目にかけん。」「いか様隙取つてはお咎めもいかゞ、拙者は是よりお暇賜はり病氣保養致したし。」「おゝ役目は濟んだ。勝手にせよ。」と首請取り、玄蕃は館へ、松王は駕にゆられて立ち歸る。

夫婦は門の戸ぴつしやり締め、物もえ言はず、青息吐息、五色の息を一時に、ほつと吹出すばかりなり。胸撫でおろし源藏は、天を拜し地を拜し、「あゝ有り難や、かたじけなや。凡人ならぬわが君の御盛德が顯れて、松王めが眼がかすみ、若君と見定めて歸つたは、天成



寺小屋淨瑠璃本

不思議のなす所。御壽命は萬々年、悦べ、女房。」「いや、もう〳〵大抵の事ぢやござんせぬ。あの松王めが目の玉へ、菅丞相様がはいつてござつたか、但しは首が黄金佛ではなかつたか。似たと言うても瓦と黄金。寶の花の御運開きと、餘り嬉しうて涙がこぼれる。はあ有難や尊や。」と、悦び勇む折柄に、小太郎が母いきせきと、迎へと見えて門の戸叩き、「寺入の子の母でござんす。今漸う歸りました。」と、言ふ聲聞くより又びつくり、「一つ遁れて又一つ、こりやまあ何と、どうせう。」と、妻が騒げど夫は胴据ゑ、「こりや、最前

言うたは爰の事。若君には替へられぬ。うろたへ者。」と、戸浪を引退け、門の戸ぐわらりと引明くれば、女は會釋し、「これは、まあまあ、お師匠様でござりますか。悪さをお頼み申します。何處に居やるぞ、お邪魔であろに。」と言ふを幸ひ、「いや、奥に子供と遊んで居ます。連立つて歸られよ。」と眞顔で言へば、「おゝ、そんなら連れて歸りましよ。」と、ずつと通るを後より、たゞ一討と斬付くる。女もしれ者、ひつぱづし、逃げても逃がさぬ源藏が、刃するどく斬付くるを、わが子の文庫ではつしと受止め、「これ待つた、待たんせ。こりやどうぢや。」と撥ねる刃も容赦なく、また斬付くる文庫は二つ、中よりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の幡、顯れ出でしはこは如何にと、不思議の思に劍もなまり、進みかねてぞ見えにける。

小太郎が母涙ながら、「若君菅秀才のお身がはり、お役に立てゝ下

梅は飛び　この淨瑠璃では菅原道眞の作とする。無論假作である。

兄弟三人　松王、梅王、櫻丸。梅王は道眞に、櫻丸は齊世親王に仕へる。

さつたか。まだか。様子が聞きたい。」と言ふに、びつくりして、「して、それは得心か。」「得心なりやこそ、この經帷子、六字の幡。」「うむ、して、その許は何人の御内證。」と尋ねる内に門口より、「梅は飛び、櫻は枯る世の中に、何とて松のつれなかるらん。女房悦べ、悴はお役に立つたぞ。」と、聞くよりわつとせき上げて、前後不覺に取亂す。「やあ、未練者め。」と呵りつけ、ずつと通るは松王丸。見るに夫婦は二度びつくり、「夢か現か、夫婦か。」と、あきれて詞もなかりしが、武部源藏威儀を正し、「一禮は先づ後の事。これまで敵と思ひし松王、打つて變つた所存は如何に。いぶかしさよ。」と尋ぬれば、「おゝ、御不審もつとも。存じの通り、我々兄弟三人は、銘々に別れて奉公。情なや、この松王は時平公に從ひ、親兄弟とも肉縁切り、御恩を受けた丞相様へ敵對。主命とは言ひながら、皆これこの身の因果。何とぞ主從の縁切ら

んと、作病構へ暇の願。菅秀才の首見たらば、暇やらんと今日の役目。よもや貴殿が討ちはせまい。

寺小屋人形芝居

なれども、身がはりに立つべき一子なくば如何せん。こゝぞ御恩を報ずる時と、女房千代と言ひあはせ、二人の中の忰をば、先へ廻してこの身がはり。机の數を改めしも、わが子は來たかと心のめど。菅丞相には、わが性根を見込み給ひ、何とて松のつれなからうぞとの御歌を、松はつれない、つれないと、世上の口にかゝる悔しさ。推量あれ源藏殿。忰が

なくば何時までも、人でなしと言はれんに、持つべきものは子なるぞや。」と言ふに女房なほせき上げ、「草葉の蔭で小太郎が、聞いて嬉しう思ひましよ。持つべきものは子なるとは、あの子が爲に好い手向。思へば最前別れた時、何時にない跡追うたを、呵つた時のその悲しさ。冥途の旅へ寺入と、はや蟲が知らせたか。隣村へ行くと言うて、道まで往んで見たれども、子を殺さしにおこして置いて、どうまあ家へ往なるゝものぞ。死顔なりと今一度見たさに、未練と笑うて下さんすな。包みし祝儀はあの子が香奠。四十九日の蒸物まで、持つて寺入さすといふ、悲しい事が世にあらうか。育ちも生れも賤しくば、殺す心もあるまいに、死ぬる子は容貌よしと、美しう生れたが、かはいや、その身の不仕合せ。何の因果に疱瘡まで、しまうた事ぢや。」とせき上げて、かつぱと伏して泣きければ、共に悲し

死ぬる子は死にし子顔よかりき。（土佐日記）

む戸浪は立寄り、「最前にな、連合の身がはりと思ひ付いた側へ往て、『お師匠樣、今から賴み上げます。』と言うた時のこと思ひ出せば、他人の私さへ骨身が碎ける。親御の身ではお道理。」と涙添ふれば、松王丸「いや、これ、御内證。こりや、女房も何で吠える。覺悟した御身がはり、内で存分ほえたでないか。御夫婦の手前もある。いや、なに、源藏殿、申し付けてはおこしたれども、定めて最期の節、未練な死を致したでござらう。」「いや、若君菅秀才の御身がはりといひ聞かせたれば、潔う首さし延べ。」「あの、逃げ隱れも致さずにな。」「につこり笑うて。」「むゝゝゝゝゝ、出かし居りました。利口な奴、立派な奴。健氣な八つや九つで、親にかはつてお恩おくり、お役に立つは孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立ちし、さぞ草葉の蔭よりも羨しかろ、けなりかろ。忰が事を思ふにつけ、思ひ

出さるゝ、出さるゝ。」と、さすが同腹同性を忘れかねたる悲歎の涙。千代「なう、その伯父御に小太郎が逢ひますわいの。」と取付いて、わつとばかりに泣き沈む。

歎も洩れて菅秀才、一間の内より立出で給ひ、「我に代ると知るならば、この悲しみはさすまいに。かはいの者や。」と御袖をしぼり給へば、夫婦ははつと、ともに浸せる有りがた涙。「序ながら、若君樣へ御土産。」と松王つつ立ち、「申し付けた用意の乘物早く〳〵。」と呼ばはるにぞ、「はつ」と答へて家來共、御目通りに舁き据うる。「はや御出で。」と戸を開けば、菅丞相の御臺所。「なう母樣か。」「わが子か。」と、御親子不思議の御對面。源藏夫婦横手を打ち、「方々と御ゆくへ尋ねしに、いづくにか御座なされし。」松王「されば〳〵、北嵯峨の御隱家、時平の家來が聞出し、召捕りに向ふと聞き、それがし山伏の姿となり、危い

北嵯峨　今京都府葛野郡嵯峨町。

河内の國　河内國土師村。菅丞相の伯母覺壽の居村。
姫君　菅原道眞の女、刈屋姫。上記土師村に隱れてゐる。
六道能化　六道とは地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天上道。六道能化の菩薩とは地藏菩薩のこと。
賽の河原　冥途の三途の川のほとり。小兒が小石で塔を積むと大鬼が來ては崩してしまふ、それを地藏菩薩が現れて救ふといふ。
劍　冥途にあるといふ劍の山。
死出の山　冥途の閻魔王國の境にあるといふ山。

ところを奪ひ取つたり。急ぎ河内の國へ御供なされ、姫君にも御對面。こりや、こりや、女房、小太郎が死骸あの乘物へ移し入れ、野邊のおくりを營まん。」「あい。」と返事のそのうちに、戸浪が心得、抱いて來る、死骸を網代の乘物へ、乘せて夫婦が上着を取ればあはれや內より覺悟の用意、下に白無垢、麻上下。心を察して源藏夫婦「野邊の送に親の身で、子を送る法はなし。われ〳〵夫婦が代らん。」と立寄れば、松王丸「いや〳〵、これはわが子にあらず。菅秀才の亡骸を、御供申す。いづれもは門火、門火。」と、門火を賴み、賴まるゝ、御臺、若君もろともに、しやくり上げたる御涙。冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛、釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、賽の川原で砂手本、いろは書く子はあへなくも、散りぬるいのち是非もなや。明日の夜たれか添乳せん、らむ憂いめ見る親心、劍と死出の山けふこえ、あさき夢見

鳥邊野　古來京都の墓地火葬地として名高い處。今の京都市五條坂邊六道の東南。
得能文　哲學者、東京高等師範學校教授、文學博士。
五井蘭洲　江戸時代の儒者で國學者。名は純禎、通稱は藤九郎。大阪の人。懷德書院教授。寶曆十二年（一七六二）歿、年六十六。

し心地して、跡は門火にゐひもせず。京は故郷と立ちわかれ、鳥邊野さして連れかへる。（菅原傳授手習鑑）

一五　學の話

得能文

一

昔、德川時代の儒者に五井蘭洲といふ人があつた。此の人の書いたものゝ中に、左の如きことが載つて居る。

「或人の戯語に、人あり、いふ、『讀書學問はよきことなれど、一の疵あり、身持をよくせねばならぬことなり、これ疵なり。』といふ。……又人あり、いふ、『讀書學問はよきことなれども一の疵あり、高慢になるが疵なり。』……人又いふ、『讀書學問はよきことなれど一の疵あり、貧乏になる、是一の疵なり。』と、……」

是は固より「戯語」に過ぎないのであらうけれど、當時の世間には かやうな考を持つて居た者もあつたのであらうし、又今日に於て も、世間には同様に考へて居る者もあるであらう。我々には一笑 にだも値せざることのやうに思はれるが、併しながら、一體學問と いふものはどんなものであるかと云ふことになれば、初めに思う た程に容易な事柄では無いであらう。世間では屢〻讀書と學問と を同一視したり、物識と學者とを混同したりするのは、一體「學」とい ふことの如何なることであるかに就いて、明瞭判然たる考が無い からであらう。

二

プラトーン

希臘の大哲學者。（西紀前四二七―三四七）

プラトーンが云つたやうに、人間の魂は常に本當のものを求め て止まない。幾たびか蹉跌しながら、屈せず撓まず、本當のもの、眞

實なるものを喘ぎ求めるのである。斯くして眞實なるものを欣 求し、智惠を欣慕することによつて、學が生じてくるのである。本 當のもの、眞實なるものを欣求するは、人間の衷情より發露するも のであつて、何等かの爲にするが如きものとは迥然として撰を異 にして居る。それ故に、眞に學にいそしむ心は、富貴功名によつて 動かされる心とは別である。富貴功名を輕蔑すると云ふのでは 無いが、之を念頭に置かないのである。從つて貧乏もする。併し ながら、眞に參學實究の人に取つては貧乏もさほど苦にはならぬ。 其れよりも、本當に欣求すべき價値があると思はれるものに向つ て、邁進して倦むことを知らないのである。學は學の爲に求むべ きもので、決して何等かの爲にすべきものではない。道德に就い ても亦同じことが言はれる。道德は道德の爲にすべきもので、決

プラグマティスト Pragmatist. 實用主義者。實際主義者。
デュウイ 米國の實用主義的哲學者。

して他のものゝ手段になつてはならない。プラグマティストであるデュウイですらも、此の事を痛論して、道德的行爲は、それ自らの爲に行ふべきであつて、他の目的の爲であつてはならない。例へば、自分の修養の爲と思つてもならない事を說いて居る。愛國者は眞に愛國の熱情に驅られて愛國的行爲を爲すのであつて、これが自分の道德的修養の爲だと思へば、其の目的を誤る。其の他の德に於ても同樣であつて、其れが自己の修養になるなどと思へば失敗に歸すると云ふのである。是は正しい考であると思ふ。

學にあつても其の通りであつて、本當のもの、眞正なるものを摑みたいといふ、止むに止まれぬ衷心からの要求に驅られて出てくるのである。決して何等か他の目的の爲に用ひられる手段では ない。他の目的の爲に爲すのは學の應用であつて、學そのもので

は無い。例へば物理學を應用して機械を造るといふが如き場合は、初めから利用を目標にして居るのである。併し、これは決して學そのものではない。學は自由なる精神の自發的の行爲である。

三

既に學は本當のものを摑まんとする自由なる精神の自發的行爲なるが故に、學人と「物識」とは異なつてゐる。「物識」といふは、博學多識の人であつて、自發的に進んで研究すると云ふよりも、寧ろ他人の研究したものを雜然と捃集するものである。「物識」は知識の所有者である。これに反して、學人はどこまでも進んで欣求するものである。「物識」の器具は記憶力である、學人の器具は思索力である。「物識」は既成の智識を貯へるものである、學人は心を虛しうして知識を求めるものである。兩者は其の態度に於て全く異な

程伊川　宋時代の哲學者。程頤、字は正叔。大觀元年(一七七)卒、年七十五。

つてゐる。程伊川曰く「多聞識者、猶廣儲藥物也、知所用爲貴。」と、又曰く「學不貴博、貴於正而已。」と。

從つて讀書そのものは學では無い。固より讀書は先人の思想を知り、自己の趨向すべき所を知る爲に必要缺く可からざるものである。然れども、其の爲に讀書を以て直ちに學と同一視することは出來ない。況してや漫然として多讀するに於ては、精神の自發性を妨げ、思索を攪亂せしめる恐がある。これ古來屢〻多讀が戒められた所以である。然れども、選擇其の宜しきを得て讀書に沈潛することは、學そのものゝ性質からして、善いことであり、貴いことである。これ昔から讀書を貴び、やがて學と同一視されるやうにもなつたのである。

四

富貴も　富貴不レ能レ淫、貧賤不レ能レ移、威武不レ能レ屈、此之謂二大丈夫一。(孟子)

呂叔簡　明代の儒者。名は坤、號は心吾。

學はそれ自ら目的であつて、他の目的の手段方便では無い。他のものゝ手段ならば、學の價値は他のものに依存することになるであらうが、それ自らが目的であるとすれば、それ自身に價値を有するものである。而してそれ自身に價値あるものは眞に價値あるもの、最も價値あるものである。眞に價値あるもの、最も價値あるものは尊嚴なものである。故に此の尊嚴なものに從事する學人は、やがて自ら持すること尊嚴ならざるを得ない。學人は富貴も淫する能はず威武も屈する能はざる底の氣概を具へるに至るのは當然のことゝ云はざるを得ない。然れども、此の氣概は一面には謙虛である。眞の學人は常に眞理の前には、謙虛でなければならぬ。之に反して、呂叔簡が言つたやうに、學進まずして汲々焉として毀譽を恤へ、榮辱を憂へるが如きは眞の學人ではない。

菅公謫居（京都北野神社藏）

五

學とは知識の體系である。而して經驗の範圍によつて知識の領域が分れるに從つて、學は次第に分化してそれ〴〵の特殊科學となつてくる。かくて數學・物理學・化學・生物學等となつて分れてくるのである。特殊科學は此の如く種々に分れるが、しかし何れも皆學である。學たることの性質を持つて居るのである。この學たることは經驗的事實では無くして、觀念的である。理想である。この理想は特殊科學の指導原理である。而して學たることは理論の當爲によつて基礎づけられる。卽ち理論的當爲によつて學が成立つのである。如何なる學でも、苟も學といはれる限は、此にその根據を有して居る。而して知識は無限の過程である。從つて學はまた無限の過程であらねばならぬ。學人はこの無限

の過程に於て無限の努力を爲すのである。また爲すべきものである。（淺人零語）

一六　菅公の左遷

時平　藤原時平。
菅原　菅原道眞。

醍醐の帝の御時、時平のおとゞ左大臣の位にて、年いと若くておはしき。菅原のおとゞ、右大臣の位にておはします。そのをり、みかど御年いと若くおはします。左右大臣に世の政を行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり左大臣御年二十八九ばかり、右大臣年五十七八にやおはしけん。共に世の政をせしめ給ひし程に、右大臣はざえも世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても殊の外にかしこくおはしまし、左大臣は御歳も若く、ざえも殊の外に劣り給へるによりて、右大臣御おぼえ殊の外におはしましたるに、

左大臣安からずおぼしたる程に、さるべきにやおはしけん、右大臣の御爲によからぬこと出で來て、昌泰四年正月二十九日、太宰權帥になし奉りて、流され給ふ。

菅原道眞

この大臣の子ども數多おはせしに、女君たちは婿取し、男君たちは皆程々につけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君・女君たち慕ひ泣きておはしければ、「小さきはあへなん。」と公も許さしめ給ひしかば、共に率て下り給ひしぞかし。帝の御掟極めて生憎におはしませば、この御子どもを同じかたにだに遣さざりけり。

東風ふかば　五句、拾遺集には「春を忘るな」とある。

亭子の帝　宇多法皇。

流れゆく　三句、一本「水屑となりぬとも」

山崎　山城國乙訓郡山崎村。

方々にいと悲しく思召して、御前の梅の花を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花
あるじなしとて春なわすれそ

又、亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れゆくわれは水屑になりはてぬ
君しがらみとなりてとゞめよ

なき事によりてかく罪せられ給ふを、からく思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。そのほど極めて悲しきこと多かり。ひごろ經て、都遠くなるまゝにあはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくゝも
隱るゝまでにかへりみしはや

また播磨の國におはしましつきて、明石のうまやといふ處に御

宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らせ給へる詩いと哀し。

驛長無驚時、變改。　一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしまし著きて、あはれに心細く思さるゝ夕、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶり　なげきよりこそもえまさりけれ

また雲の浮きて漂ふを御覽じても、

山わかれ飛びゆく雲の歸り來る　かげ見るときぞなほ賴まるゝ

さりともと、世を思召されけるなるべし。月のあかき夜、海ならずたゞよふ水の底までも

大貳の居處　太宰の帥の下に大貳がある。帥は常に京にゐるから、太宰府を直ちに大貳の居處ともいつた。

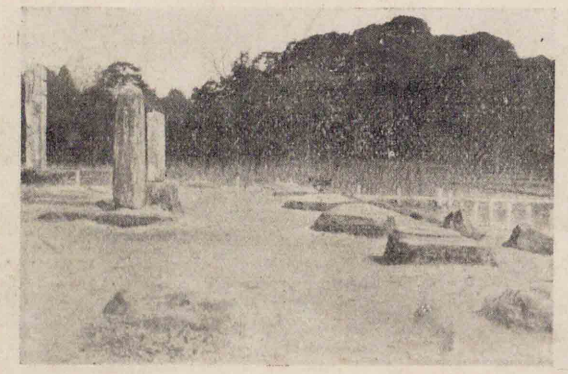
都府樓　太宰府の役所。

觀音寺　筑前筑紫郡水城村にある天台宗の寺。

文集　白氏文集。白樂天の詩集六十一卷。

白居易　晩唐の詩人、字は樂天。

遺愛寺　「香爐峰下、新ト山居、草堂初成偶題東壁」と題する律詩の二句。



都府樓址

きよきこゝろは月ぞてらさん

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照らし給はめとこそはあめれ。

筑紫におはします所の御門も固めておはします。大貳の居處は遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の響をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色。
觀音寺只聽鐘聲。

「これは文集の白居易の、『遺愛寺鐘欹枕聽。香爐峯雪撥簾看。』といふ

詩にもまさざまに作らしめたまへり。ここそ、昔の博士どもは申しけれ。

作らしめ給へりける詩

「九日後朝同賦二秋思一應レ制」と題する詩。

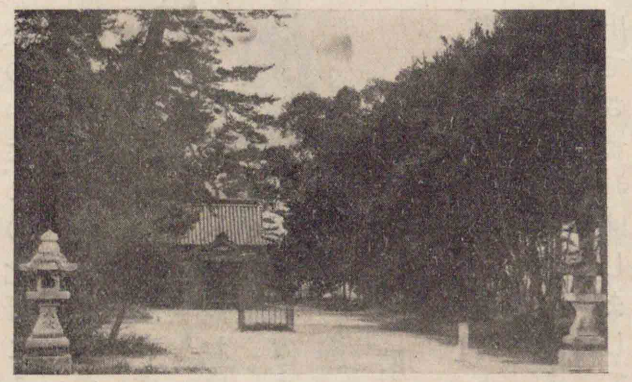
觀音寺

かの筑紫にて九月十日菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましゝ時、九月の今宵内裏にて菊の宴ありしにこの大臣の作らしめ給へりける詩を、御門かしこく感じ給ひて、御衣たまはせ給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとゞその折思召しいでて作らせ給ひける。

去年今夜侍二清涼一。
恩賜御衣今在レ此。
秋思詩篇獨斷腸。
捧持毎日拜二餘香一。

後集
菅家後集。

この詩いとかしこく、人々感じ申されぬ。このことども、只ちりぢりなるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを書きて一卷とせしめたまひて、後集と名づけられたり。また折々の歌を書きおかせ給へりける、おのづから世に散りきこえしなり。



菅公遺址榎寺

また雨の降る日、うちながめ給ひて、

あめの下かわける程の
なければや
著てしぬれぎぬひるよしもなき

うせ給へり
時に延喜三年三月二十五日、年五十九。
北野宮
官幣中社北野神社。京都市上京區にある。
安樂寺
太宰府村。今天滿宮のある處。
大鏡
八卷。作者未詳。文德天皇より後一條天皇に至るまでの假名文の歷史。
花山院の時
永觀二年（一六四四）。

やがてかしこにてうせ給へり。

夜の中に、この北野にそこらの松をおほさしめたまひて、渡り住みたまふをこそは、只今の北野宮と申して、あら人神におはしますめれ。おほやけも行幸せしめたまふ。いとかしこくあがめ奉りたまふめり。筑紫のおはしましどころは安樂寺といひて、おほやけより別當・所司などなさせ給ひて、いとやんごとなし。（大鏡）

一七　けづり屑

花山院の御時に、五月下つ闇に五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしくかき亂れ雨の降る夜、帝さうぐしくや思し召しけん、殿上に出でさせおはしまして遊びおはしましけるに、人々御物語りなどし給ひて、昔怖ろしかりし事どもなどに申しなり給へるに、「今宵こそいとむつかしげなる夜なめれ。かく人がちなるだにけしきなる。まして物離れたる處などいかならん。さあらん處に、ひとりいなんや。」と仰せられけるに、「えまからじ。」とのみ申し給ひけるを、入道殿は、「いづくなりともまかりなん。」と申し給ひければ、さるところおはします帝にて、「いと興あることなり。さらばいけ。道隆は豐樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へいけ。」と仰せられければ、よその君たちは、便なき事をも奏してけるかなと思ふ。又承り給へる殿原は、御氣色かはりて、益なしとおぼしたるに、入道殿はつゆさる御氣色なくて、「私の從者をば具

入道殿
藤原道長。時に十九歳。
道隆
道長の長兄。時に三十二歳。
豐樂院
大極殿と並んで節會の行はれる處。
道兼
道長の仲兄。時に二十四歳。
仁壽殿
御内宴相撲蹴鞠など行はれる處。
大極殿
天皇の政事を執らせられた處。又國儀大禮を行はせられた處。

藤原道長

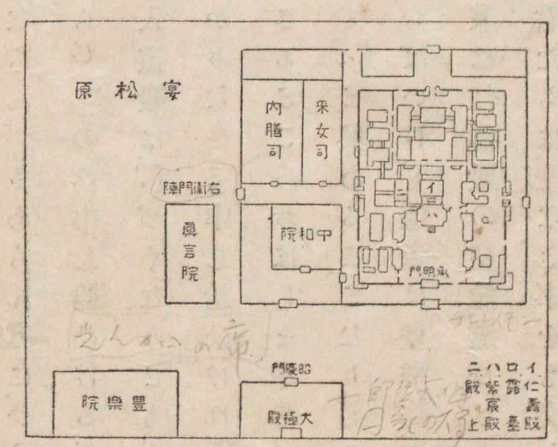
し候はじ。この陣の吉土にまれ、瀧口にまれ、一人昭慶門まで送れと仰せごとたべ。それより内にはひとり入り侍らん。」と申し給へば、「證なき事にこそ。」と仰せらるれば「げに」とて、御手箱におかせ給へる小刀さして起ち給ひぬ。今二所も、にがむ〳〵各、おはさふじぬ。

子四つと奏して、かく仰せられ議する程に、丑にもなりにけん、「道隆は右衞門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよ。」と、それをさへ分たせ給へば、しかおはしまし合へるに、中關白殿、陣まで、念じておはしたるに、宴の松原の程に、その物ども

右衞門の陣　宜秋門。

中關白殿　道隆。

宴の松原　豐樂院北方の大空地。



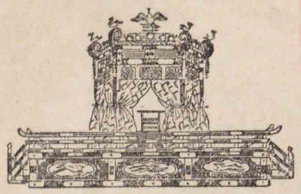
内裏略圖

なき聲どもの聞ゆるに、術なくて歸り給ふ。粟田殿は、露臺のあたりまで、わなゝく〳〵おはしたるに、仁壽殿の東面の砌のほどに、軒とひとしき人のあるやうに見えければ、物もおぼえで、身の候はゞこそ仰言も承らめとて、各かへり參り給へれば、御扇をたゝきて笑はせ給ふに、入道殿は、いと久しう見えさせ給はぬを、いかゞと思し召すほどにぞ、いとさりげなく事にもあらずげにて參らせ給へる。「いかに、いかに。」と問はせ給へば、いとのどやかに、御刀に削られたるものを取り具して奉らせ給ふに、「こは何ぞ。」と仰せらるれば、「たゞにて歸り參り侍らんは、證さぶらふまじきによりて、高御座の南面の柱のもとを削りとりて候ふなり。」と、つれなく申し給ふに、いとあさましう思し召さる。

こと殿たちの御氣色は今にもなほ直らで、この殿のかくてまゐ

粟田殿　道兼。

露臺　仁壽殿の傍にある屋根のない建物。舞など行はれる處。



り給へるを、帝より始め感じのゝしり給へど、羨しきにや、又いかなるにか、物もいはでぞ候ひ給ひける。

なほ疑はしく思しめされければ、つとめて、藏人して「削屑をつがはして見よ。」と仰せごとありければ、もていきて押しつけて見たうびければ、つゆ違はざりけり。そのけづり痕は、いとけざやかにて侍るめり。末の代にも見る人は、なほあさましきことにぞ申ししかし。（大鏡）

大鏡　八卷。作者不詳。文德天皇より後一條天皇までの假名文の歷史。

御堂　法成寺。京都の東北隅、京極土御門にあつた。

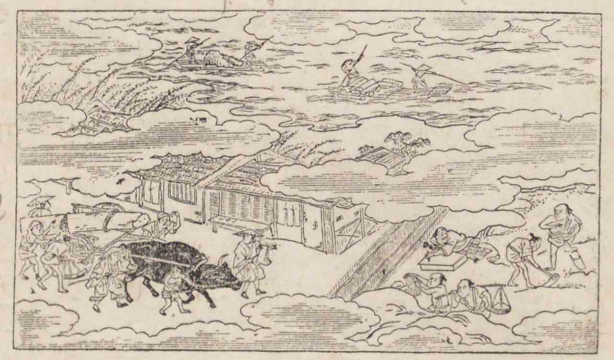
攝政殿　藤原頼通。道長の長子。世に宇治關白といふ。

殿の御前　道長。

一八　御堂造營

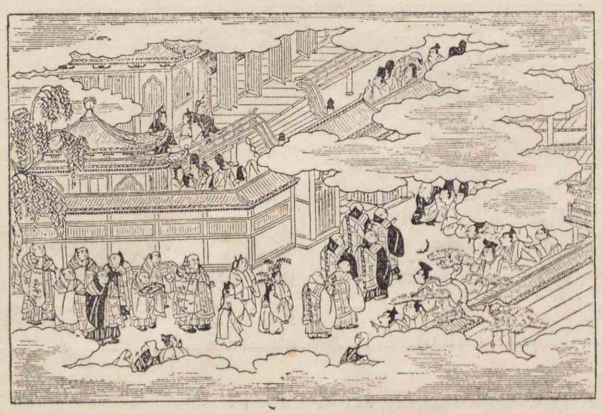
今は御心地例ざまになり果てさせ給ひぬれば、御堂の事思し急がせ給ふ。攝政殿國々までさるべき公事をばさるものにて、まづ此の御堂の事を先につかうまつるべき仰言のたまふ。殿の御前も、「此の度生きたるは別事ならず、此の願の叶ふべきなめり。」と宣はせて、他事なく、たゞ御堂におはします。

方四町をこめて大垣にして瓦葺きたり。様々に思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心許なく、日の暮るるも口惜しう思されて、夜もすがらは、山を疊むべきやう、池を掘るべきやう、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂々々、方々様々造りつゞけ給へり。御佛はなべての樣にやはおはします。丈六の金色の佛を、數もしらず作りなべ、そなたをば北南と馬道をあけて、道を整へ造らせ給ひて、廊・渡殿かず多く



法成寺造營

作らせなんと思し給ふに、鷄の鳴くも久しく思され、宵曉の御行も怠らず、安きいも大殿ごもらず、唯この御堂の事のみ、深く御心にしませ給へり。日々に多くの人々參り罷で立ちこむ。さるべき殿原をはじめ奉りて、宮々の御封、御莊ごもより、一日に五六百人・千人の夫ごもを奉るにも、人の數多かることをばかしこきことに思したり。國々の守ども、地子官物はおそなはれども、只今は此の御堂の夫役・材木・檜皮・瓦などと競ひつかうまつる。大方近きも遠



法成寺落成

多く參らする事を、我も〳〵

きも參りこみて、品々方々、あたり〳〵につかうまつる。

或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかり並みゐてつかうまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のぼりゐて、大きなる木どもには大綱をつけて、聲を合せてえさまさと引上げさわぐ。御堂の中を見れば、佛の御座作りかゞやかす。板敷を見れば、木賊・椋の葉などして、四五十人手毎に並みゐて磨き拭ふ。檜皮葺・壁塗・瓦作などども數をつくしたり。又年老いたる翁などの、三尺ばかりなる石を心に任せて切りとゝのふるものあり。池を掘るとて四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人のぼりたち、又大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに綱をつけて、叫びのゝしりて引きもてのぼる。鴨川の方を見れば、筏といふものに榑・材木を入れて、棹

梅津　京都府葛野郡桂川の東。

須達長者　須達多といふ舍衞國の富豪が祇園精舍を建てゝ佛に奉つたといふ。

祇園精舍　釋迦時代にあつた印度の古寺。

さして心地よげに謠ひのゝしりて上るめり。大津・梅津の心地するも、西は東といふことはこれなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來たれど沈まず。すべて色々樣々いひつくし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍作りけんも、かくやありけんと見ゆるを、冬の室、夏の風、各ゝこゝごとなり。

「かゝる御勢にそへて入道せさせ給ひて後は、いとゞ勝らせ給へりと見えさせ給ふにも、猶なべてならざりける御有樣かなと、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は、遙かに拜み參らす。今は此の御堂のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かりき。そなたざまに赴けば、海の涙もやはらかにたちて、此の御堂のものを持て運ばせ、河も水すみて、快く浮べても參ると見ゆ。なほなべて、此の

長谷寺　奈良縣磯城郡初瀬町。

天王寺　大阪市東區四天王寺。

榮華物語　四十一卷。作者不詳。宇多天皇より堀河天皇に至るまでの事を記した雜史。

飛鳥川　奈良縣（大和）高市郡にある。世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵は今日の瀬となる（古今集）

桃李物言はず　桃李不レ言春幾暮。煙霞無レ跡昔誰栖。（和漢朗詠集）

世の事とは見えさせ給はず。「まづは、先年に長谷寺にある僧の、御祈禱をいみじうして寢たりける夢に、大きにいかめしき男の出で來て、「何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の、佛法興隆の爲に生れ給へるなり。」とぞ見えさせ給ひける。又天王寺の聖德太子の御日記には、「王城より東に、佛法弘めん人を我と知れ。」とこそは書置かせ給ふなれ。何れにてもおろかならぬ御事なり。

飛鳥川の淵瀬

吉田兼好

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事さり、樂しみ悲しみ行きかひて、花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、變らぬ住家は人改まりぬ。桃李物言はねば誰と共にか昔を語らん。まして見ぬ古へのやんごとなかりけん跡のみぞ

（榮華物語）

京極殿　京都の土御門の南、京極の西にあつた。道長の邸宅。

正和　花園天皇の朝。

行成　藤原行成。小野道風と藤原佐理と並んで三蹟と稱せられる。

兼行　藤原兼行。能書家。

いと果敢なき。

京極殿・法成寺など見るこそ、心ざし、止まり事變じにけるさまはあはれなれ。御堂殿の造り磨かせ給ひて莊園おほく寄せられ、我が御ぞうのみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までと思し置きし時、いかならん世にも斯ばかりあせ果てんとは思してんや。大門・金堂など近くまでありしかど、正和の頃南門は燒けぬ。金堂は其の後倒れ伏したる儘にてとり建つる業もなし。無量壽院ばかりぞ其のかたとて殘りたる。丈六の佛九體、いと尊くて並びおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、鮮かに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども未だ侍るめり。これも亦何時までかあらん。かばかりの名殘だになき所々は、おのづから石ずゑばかり殘るもあれど、さだかに知れる人もなし。「さればよろづ見ざらん世までを思ひおきてんこそ、果敢なかるべけれ。」

（徒然草）

永井潛　廣島縣の人。生理學者。醫學博士。東京帝國大學教授。

一九　若き友よ

永井潛

若き友よ。「世界は勇者に屬す。」と云ふ獨逸の格言を知るか。「人生に於て、心と體の勤勞なくしては、一事の果を結ぶなし。努力し尙努力する、是ぞ實に人生なる。」と言ふ金言もあれば、「天才とは忍耐のことなり。」と言つた名句もある。寔に其の通りである。人一たび、勇氣の帆を擧げ、努力の櫂を揮ひ、堅忍の舵を握る時、如何なる人生の狂瀾怒濤をも乘り切つて、船を確實に成功の彼岸に到達せしめることが出來るのである。而も此の勇氣も、努力も、耐忍も、皆剛健鞏固なる意思より生れ出づるものであることを念ふ時、意思は

人格の中心であり、意思卽ち人であると云ふことが出來るではないか。

若き友よ、剛健なる意思は、如何なる境遇の下にも、絶えず人をして前進せしめ、向上せしむるのみである。「叩けよさらば啓かれん。」強き意思は、強き冀望を喚び起し、強き冀望は、強き豫想を招來し、強き豫想はよく「可能」を變じて「實在」となすのである。傳ふる所によれば、佛蘭西の一青年士官が、「予は佛蘭西の元帥たらんと欲す。大將軍とならんと志す。」と云ひつゝ、部屋を歩むを常として居たが、後年彼は遂に佛蘭西の元帥となつた。又嘗て、或指物師が一高官の椅子を特に入念に修覆して居たので、人が偶その譯を問うた所が、「自分が、他日この椅子に掛ける時、快よからんが爲である。」と答へた。

漢の高祖　劉邦。項羽と共に秦を伐つて天下を一統した。

ワシントン　アメリカ合衆國第一代大統領。（西暦一七三―一七九九）

不思議にも彼は、遂にその椅子の主人公となつた。

若き友よ。剛健なる意思を有つ者は幸なる哉。彼に在つては、失敗卽ち成功であり、困難は最良の師となり、窮乏は最愛の友となるのである。試みに香氣ある草を手に取つて見よ。之を揉むこと愈〻強うして、其の香氣は益〻高くなるではないか。

將軍を試錬するものは戰勝よりも戰敗である。漢の高祖は連戰連敗して、而も支那を統一し、ワシントンも亦戰に勝つよりも負けること多くして、而も米國を救うたではないか。人生の戰に於て、一度敗れ、二度敗れ、三度敗れたとて、斷じて失望落膽してはならない。敗殘なくば勝利なく、困厄なくば成功はない。人生の行手に横はる如何なる障碍も、努力と堅忍とによつて征服せられざる

ハンニバル
カルタゴの名將。第二ポエニ戰爭にアルプスを越えてイタリアに進んだ。（西暦前二四七―一八三）

リンドバーク
アメリカの飛行家。陸軍大佐。一九二七年五月最初の大西洋無着陸横斷飛行に成功した。（西暦一九〇二―）

パーク
アメリカの社會學者。（西暦一八六四―）

天の將に天將レ降ニ大任於是人也、必苦ニ其心志一、勞ニ其筋骨一、餓ニ其體膚一、空ニ乏其身一、行拂ニ亂其所一レ爲。（孟子）

ものなしと確信せよ。斯くてアルプスの峻峯もハンニバルやナポレオンの脚下に蹂躙せられたではないか。縹渺たる大西洋の波濤もリンドバークによつて一氣に横斷されたではないか。強くあれ、勇氣を鼓舞せよ。蕁麻は、大膽にこれを摑むとき、絹絲の如く軟かである。「艱難は神の命令によつて、我等の上に置かれたる峻嚴なる教師である。神は、親の如き保護者教誡者にして、我等が我等を知るよりも、尙よく知り、我等が我等を愛するよりも尙よく愛す。」と云つたパークの言を思へ。「天の將に大任を此の人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しましむ。」と言つた孟子の教を玩味せよ。

若き友よ。各人自ら王者であり、自己の支配すべき王國を有つ

ソクラテース
アテネの哲學者。（西紀前四六九―三九九）

て居るではないか。其の王國は、卽ち自分自身であり、其の支配者は、卽ち自由なる意思である。自由と云ふのは、放縱を意味するのではない。たとひ、哲學者や、倫理學者や、遺傳學者が、何と議論しようとも、我等の意思は絶對に自由である。水に浮べる浮草の、流れのまに〳〵、昨日は東、今日は西と云ふ如きものではなく、剛健なる水泳者が、自らの力によつて勇往驀進し、波を切り、流に遡つて、己れの欲する目的地に到らんとする意味に於て、確かに自由である。そして自由は責任を伴ひ、支配は任務を負はしめる。我等は、我等の剛健なる意思を試錬すべく、我が王國を支配しなければならない。ソクラテースの云へる如く、「世界を動かさんと欲する者は、須らく先づ自己を動かさなければならない。」

オデッセウス　ギリシヤの詩聖ホーマーの叙事詩「オヂッセウス」の主人公。

若き友よ。青年が人生の花園に歩を運ぶや、其の路の兩側には、幾多の惡鬼妖魔がむらがり立つて居る。彼等は或は笑み、或は媚び、或は脅し、或は迫り、あらゆる手段を以つて、卿等を試驗し、誘惑せんとして居る。一度びこれに打ち負かされる時、夫れは永遠の墮落であることを思はなければならない。傍目も振らず前進せよ。男らしく、唯男らしく、「否」を叫び「否」を實行せよ。一歩躊躇せば、一歩破滅の淵に近づくことを思はなくてはならない。幾多の妖魔の中、青年にとつて最も恐るべく惡むべきものは酒色である。これは誰もが其の恐るべきことを知つて居りながら、殆んど誰もが、それから逃れることの出來ない魔手を延ばして、卿等を抱きすくめんとするのである。オヂッセウスが、妖女の歌に耳を覆うて、一心不亂に漕ぎに漕いで、巨巖相擊つて船を微塵に碎くと云ふ恐ろし

地獄の煙　煙草のこと。喫煙の風が初めて歐羅巴に入り込んだ時當時の羅馬法王が誡めて言つた語である。

桃源郷　陶淵明の桃花源記に記されてある理想郷。

二宮尊德　經濟家。通稱金次郎。相模の人。安政三年(一八五六)歿。

い海門を漕ぎ拔けた樣に、非常な勇氣と努力とを以てして、始めて此の恐ろしい魔手を振りほどくことが出來るのである。甘い言葉、美はしい瞳、それは人間の血脈に、恐ろしい黴菌を注射する針と思へ。唇に當つるに先だつて、勢よく盃を脚下に叩き附けよ。さうして序に、地獄の煙をつぎ込む煙管をも一擲せよ。斯る時、卿等は、最も大なる敵よりも、尙打ち勝ち難い自己に克ち得たる、云ひしれぬ歡を感ずるであらう。

若き友よ。神は桃源郷に達する迄に、勤勞と困厄との門戸を置いてゐる。二宮尊德翁の言に「天は萬物を生ずれども、人は自ら勤勞して之を取り、之を作らなければ、其の用をなすことが出來ない。それ故に、森林に方材なく、麻畑に織布はない」と云ふ教訓がある。

「汗なければ甘味なし。」と云ふ英國の格言がある。努力せよ、努力せよ。努力なくして、人生何の生甲斐があらうぞ。時正に新涼郊墟に入り、神澄み、體蘇らんとして居る。剛健な意思を興起し、旺盛なる元氣を振作する、今よりよき時はないのである。

ファブルル

顧みて果物屋の店頭を見れば、紫水晶の如き甲州葡萄が山をなして輝いて居る。夜更うして、蟋蟀・草雲雀・鈴蟲などの音が、雨の如く滋い。

憶へば文治・建久の昔、雨宮勘解由が、路傍に山葡萄を見附けて、栽培を始め、甲斐の徳本が更に之を改良して、遂に今日の隆盛を致したのではないか。メエーテルリンクをして「今の文明世界が持つて

徳本
姓は長田。醫家。本草家。三河の人。後、武田信虎の客となつて甲斐に留る。寛永七年（一六三〇）歿。

メエーテルリンク
ベルギーの文豪。（西暦一八六二——）

ゐる至高至純の名譽の一つ、最も正當な意味での、賢明な博物學者の一人、そして又近代的意味での、最も靈妙な詩人の一人だ。」と迄、激賞せしめた、アンリー・ファブルは、昆蟲に打ち込んだ彼の五十年の心血の結晶として、不朽の業績を「昆蟲記」として留めたではないか。嗚呼、「努力し、努力する、是れぞ人生なる」。而も此の努力は、凡て剛健輩固なる意思の中から生れて來る。そしてそれが、眞に人の人たる所以であり、人の貴き力でなくてはならない。

（人及び人の力）

アンリー・ファブル
フランスの有名な生物學者。（西暦一八二三—一九一五）

佐々政一
號は醒雪。京都の人。國文學者。文學博士。大正六年歿、年四十六。

荷田春滿
京都稻荷山の祠官。國學四大人の一。元文元年（一三九六）歿、年六十九。

雅文抄　後篇

佐々政一

雅文に就いて

江戸の文藝に一種の大なる勢力を加へたものは賀茂眞淵によつて勃興された古學派の歌文である。

眞淵は荷田春滿の遺志を繼いで、謂はゆる國學研究に從事し、萬葉考を初め許多の著述註釋を遺してゐる。その主張するところは、漢學や佛教の影響を蒙らない時代に復るといふにあつて、衣食住を初として、一切を古に擬せんとさへ企てた。さもあれ、それは到底行はるべき事ではないので、實際はその和歌と文章との復古に止つたのである。かつ眞淵の才は、研究によつて古道を明かにするといふよりも、寧ろ歌文の創作に長じてゐた。故に自然その門人にも學者よりも歌人の方が遙かに多かつた。

眞淵が擬古の歌文は實に稀世の作であつて、千年以前の言語を運用して毫も澁滯の痕がない。併しそれは古語を以て新思想を咏じようと企てたものではなくて、その思想をも古に復すことが、主張の隨一であつた爲に、斯く自在なることを得たのであらう。それにしても萬葉以降全く絶えてゐた長歌を復興し、從來隨筆や物語の外には全く用ひられなかつた文體で、新に支那人の小品文などに比すべき文藝上の創作たる雅文を創めたと共に、我が文學界に幾多の優美な、或は蒼古な言語を復活せしめて、一般文藝の詞藻を豐富にし高尙にした偉績は、これを認めねばならぬ。たゞ萬葉調の和歌や、源氏流の雅文は、彼一派の文學で、一般社會の時代思潮に切實ではなかつたが、併し又その復古的思潮は、當時の時代思潮中に一流域を占めてゐたもので、その影響も亦尠しとはいはれない。彼の歌文集には、賀茂翁家集・縣居歌集がある。

眞淵の門下中、文藝上に盛名のあつたのは、村田春海と加藤千蔭とを以て隨一とする。春海は漢文に長じ、その豐麗なる格調に倣つて、彼の雅文は開闔起伏の自在を極め、眞淵の長歌と共に、この派の代表的作品

手柄岡持　小說家。明誠堂喜三二の狂歌師としての戯名。本名平澤常富。文化十年(一八一三)歿、年七十九。

蜀山人　狂歌師太田南畝のこと。又四方赤良ともいふ。文政六年(一八二三)歿、年七十五。

といはれてゐる。琴後集がその歌文集である。千蔭の盛名は春海に遜らない。彼は手柄岡持や蜀山人等とも親しく、橘八衢といふ名で狂歌をも作り、黄表紙などにも趣味を持つてゐて、一面當代の洒落な思潮にも觸れてゐたから、文章も輕妙な趣を具へてゐるが、動もすると莊重を缺くの虞がある。家集には、朮が花がある。この二人の文章和歌は、既に、眞淵の如く强ひて高古ならんとはせず、和歌には古今集以後の調が頗る多い。

この他、當時にあつて雅文に名を得たものには、京都の伴蒿蹊、春海の門人清水濱臣、本居門下の藤井高尙などがあつた。蒿蹊の閑田文草・閑田耕筆・閑田次筆、濱臣の泊洒舍集・泊洒文藻、高尙の松の舍文集・松の落葉等は、皆見るに足るべきものである。

本居宣長は、近世に傑出した偉人で、單に眞淵門下の雅文家として見るべきでない。その鈴屋集の歌文の如きは、たゞ研學の餘業に過ぎぬ。契沖以來復古派の學者は、その類極めて多かつたが、眞に學者らしい學者は、宣長に於て初めて之を見ると謂つてよからう。（近世國文學史）

賀茂眞淵　遠江濱松在岡部村の人。その家が賀茂新宮の祠官であるので姓を岡部ともいふ。縣居はその家號。初め京に出て荷田春滿に學び、後江戸に下り、弟子に教へた。延享三年田安宗武に聘せられ、寶暦十年致仕し、明和六年(一七六九)歿、年七十三。賀茂翁家集はその和歌雜文紀行等を、門人村田春海・加藤千蔭の編したもの、五卷ある。

賀茂翁家集

賀茂眞淵

一　箱根山

加茂眞淵

明けゆくまゝに、けふは富士のねに雲の塵もゐず、ゆく〳〵見んとて馬にてぞ過ぐる。古に擬ふる長歌よまんとて、馬の上ににゝよびつれど、眠たさに、さだかにも續けられねば、またこそと思ひて、半ばにてやみぬ。三島に宿りぬ。夜をこめて箱根路のぼる。

誰かしる故郷さふる山々を
月に眺むる夜のあはれは

聲きく時　奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき（古今集、讀人知らず）

ゆはた　絞染の布。

戸塚　神奈川縣（相模）鎌倉郡。

十七日　元文五年九月十七日。

品川　今東京市品川區。

分け入るまゝに、身にしみ返る深山の秋風、鹿の音ながら打吹くめるを「聲きく時ぞ」とは、かゝる折こそと覺ゆ。この山をしも越えば、故郷は空さへ見えじと思ふに、更に名殘覺ゆるあけがたなり。峠の宿を過ぎゆけば、杉村の小暗きに、霧たちこめたる袖のしめりもたゞならず。

故郷の空さへ見えぬ箱根山
こゆる驛のすゞろにぞうき

山々のもみぢ葉、色々のゆはたを裁ち交へたらんが如く、世には染むべくもあらぬ梢ども、草の葉さへしぐれあへり。いかで旅ならで見ばやとぞ思ふ。戸塚の宿にやどれり。思ひ續けつる事も、疲れにければ、筆ならで枕をぞとる。十七日の晝つ方、品川わたりに到る。はる〳〵と望めば、舟よりかちよりつどふ者の多かるに、

かしこき御勢の仰がれて、旅の疲もおぼえず。

大君のとほのみやこの八十の津に
　　こころせきまでうくたからかも

ふるびにたるかな、家持が集にや入れましとて人々笑ふ。（卷之五）

二　村田春郷墓碑

玉川にうまし玉あり。人得がてにす。世の中に人あり。うまし人、また少し。こゝに、氏は村田、名は春郷といふ人あり。其のさが高くしてへりくだり、おもひがねなごやかなり。そが常はや、遠つ祖をまつるに、齋串のみてぐらを供へ、春秋の花をつくし、父母に仕ふるに、やとりのつくる物を捧げ、朝夕のうるはしみをなせども、總てたらはぬ事を恐れ、うからやからにうるはしく、友垣にうるはし。家人けだし百たりに近し。事あるに及べど、見直しいひ直す

村田春郷
眞淵門下の歌人。村田春海の兄。家産を春海に讓り、閑居して世を終へた。明和五年（一七六八）歿、年三十。

神つ習はしもてすれば、家人もうつしき青人草に習はず、こゝのひなごびにたり。好める事は、古の書をよみ、古ぶりの歌をよくす。殊に長歌を得たり。又鞠蹴る業を得て、その姿うるはしく、立居みやびかなり。その業好める人、皆世に優れたりといへり。しかはあれど、うま人の召ある時は、故を申して参らず。さは、業もて名を成さんことを恥ぢてなり。かれ曾祖父忠之、佛の法に入り、祖父忠友、聖の教を尊み、父春道、神の道を傳へ、春郷、古のみやびを得て、今に四世つぎ、世にたゝへられたり。こゝにして春郷思へらく、われ市の邊に居て、世々富めり。富はやがて浮べる雲なり。移ろふ樣なにか定らん。今務むべき時なりとて、市の外のなりどころに移ろひて、なりはひを永くせん事を謀り、父母にとひ老人に謀りて、もろもろうづなひて後、遠つ祖を祭り、かたやきして定めぬ。其の深き

加藏千蔭
もと江戸の與力。姓は橘、芳宜園又は兆園と號する。賀茂眞淵に學び歌文に長じた。文化五年（一八〇八）歿、年七十四。著書に萬葉集略解外數種がある。うけらが花七卷はその歌文集。
泊酒舍
清水濱臣の居宅。

思ひはかりある事かくのごとし。時に、明和の五とせ皐月、病ありて長月までおこたらず。三十の齡にして身まかりぬ。をちこち人皆いへらく、うまし玉こゝにしてしづきぬと。悲しきかも、此の人。惜しきかも、其の玉。あはれ。いろと春海泣きていへらく、いにし人、子なし。たゞ言の葉の殘れるあり。名代となすべし。その常の有樣をば、翁が古言をもて記さん事をこそといへり。かれ賀茂眞淵、睦じき友垣の故をもて、涙にひぢて記す。（卷之四）

うけらが花

加藤千蔭

一　泊酒舍にて蓮を看る辭

大比叡うつされたる上野の岡の麓、比良の大わだなせる池水の畔に、さゞなみや滋賀さゞれ浪もて名をおほせたる屋あり。白妙の富士のみ雪も消え、あらがねの土さへ裂くといふなる頃、人皆涼みせんとて其の宿りに集ひて、高き屋に登りて見渡せば、池の面は紅のゆはたと見ゆるぞ、蓮の花の咲き滿ちたるにてはありける。生ひ立てる葉の廣ごりたるは、宮路ゆくうま人の衣笠の如く、浮きたるは、大庭に百の官のわらふだ敷き竝べたる如く、葉に置ける露は、白玉の五百箇つどひを解き亂したるになん似たりける。池の水清らに澄みて、遊ぶいろくづ思ふことなげなり。

加藤千蔭

さゞなみや
さゞなみの志賀さざれ波しくしくに常にと君が思ほせりける（萬葉集卷二）

人々衣の紐を解きさけ、おばしまに倚り居て酒汲みかはす程、彼の岡の、木高かる瑞枝吹き越す風の涼しきに、えならぬ香の薫り來るも、たとしへなしや。彼方の岸より中島まで、長き堤を築きて、石もて作れる橋かけ渡せるは、唐土の西の湖とかいふめる處の樣かけるかたに似通ひて、遙かに行きかふ人の袖の匂さへ懷かしく見ゆ。あるじは、我が國ぶりの歌つくり、書見ることをしも好めるが上に、こと國の書をさへに、朝夕の友とせりければ、さる方の友垣にしも乏しからず。唐歌好めるなにがしの博士は、さにぬりの小舟に唐をゝめ載せて、此の花折らせまく思ひ、日の入る國のますらをの法に心を寄するは、これぞこの上の品のうてなに生れ出でたらん心地するなど言ひあへりけり。人々、心々に歌によび出づれば、もだもあらず。

西の湖　支那浙江省に在る西湖。

日の入る國　印度を指す。

なべて世のにごりにそまで住む人の
友と見るべき花ぞこのはな

かくて、上野の岡の入相の鐘、木の間しのぎて響きわたれば、み盛りに開けたりし花の、又ふゝめるさまに立返りたるも、あはれ深かるものから、をちかたの梢の鷺すら塒求むるものをとて、人々あがれ歸りぬ。（卷七）

二　蟲選の詞

秋のあはれは蟲の音ばかりなるぞなき。いで武藏野の原にしもきゝてん、家づとにもしなんとて、葉月の廿日ばかり、白妙の袖ふりはへ、ぬば玉の駒なめつゝなんゆきゆく。ふぐし持たるをとめに問へば、こゝなん武藏野の原なりといふ。かぎりも知らぬあさぢ生のうへに、たゞ富士のねのみぞいちじるき。かくて見わたせ

小手指原　東京府（武藏）入間郡にある。
足柄山　神奈川縣（相模）足柄上郡にある。

ば、ゆふべの霧はものゝふの小手指原にたち、入る日の影は赤駒の足柄山にかくろひぬ。やがて野づかさにおりたちつゝ、づい松ふきたてて、さかなまうぼり汲みかはすほどに、月はる〴〵と澄みのぼれば、おける露原みな玉をしきなせり。この野らのさまは、人のかたれるよりもげにかぎりなく、鳴く蟲のこゑは都にて聞きつるよりもいとことにて、ますらをと思へる人々らも、えたへぬなげきをなんしける。うけら・かるかや・はぎ・すゝき、分けにわけて、をちもこのもあさるまゝに、千々のむしはかず〳〵の籠にもみちにたり。そも〳〵こと狹きつぼのうちの草むらにきゝて、秋のおもひをやらんよりも、かく大野の心もひろに出でたゝんこそ、まことにますらをの遊なりけれ。かくしつゝ秋てふ秋はとひ來たらんと、野守のをぢにいひて、うちつれて歸りぬ。

石濱　今の東京市淺草區山谷堀附近。

むらさきの根はふ萱原いりみだれ
秋なくむしのこゑを聞くかな　（卷七）

三　隅田川の秋雨

葉月二十日あまり、秋のけはひの懷かしくて、例の隅田川のほとり、石濱の庵に往きて宿りぬ。有明の月のにほひも、霧たち渡る曉のさまも、所がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼふる日なん殊にあはれは深かりける。もとより萱ふける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろ〳〵と散るもあはれなり。水の面は動くともなくて鏡の如くなるに、雲のこきうすきうつろひて、かつ浮びかつ消ゆるみなわにこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みをの一筋は、さしひく汐にも交らで、とはに縹の色に流れいにて沖に出づめり。これや水

秩父の山　東京府（武藏）秩父郡にある連峰の總稱。三峰・武甲山などが最も高い。

筆蹟　嶺上雲深　立登る雲よりおくに音するははこれの海のきしの白なみ　千蔭

上の秩父の山の眞清水のおちくるならん。

うち向ふ岸のはり原のみ濃き墨がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるは、さすがにほのかに見えて、そのひまくより長き堤の見え渡るに、堤のをちなる梢は、やうくに薄墨もて書きけちたらん如く、いとしも遙けきは、たゞ靡かぬ煙とのみぞ見ゆる。こゝかしこより鴉の飛びゆきつゝ、塒の鷺の翼重げにおき出でて、河の瀨の眞菰におり立てば、みさごの群れきて水の面に浮べるもをかし。

上つ瀨より、筏師の蓑笠きて棹を筏の上に横たへ、おのれたむだきて思ふ事なげにてをり、筏は水のまにくに流れゆくも靜けし。渡

守舟さし出せば、大笠傾けて渡りゆく人の、やがて堤を歩くさまも繪によく似たり。

すべて一日のうちに、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖より風かよひきて、岸の木立も、長き堤も、あるは現れ、あるは隱れて、かぎりなき青海原に向ひたらんやうに覺ゆる折もありけり。かくてやゝ夕ぐれ近くなりゆけば、群鳥のおのがじし塒もとむるに、雁の一つら二つら渡りゆくなど、えもいはん方なし。暮れ果てても、猶ゆく水の色のみ遠白く殘りて、河ぞひ小田にいはへるみくまりの神の御火の、海人のいさり火ともいふべく、幽かに見え渡るもあはれなり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田川
たが墨がきのすさびなるらん　（卷七）

村田春海
江戸の豪商の家に生れた。平姓、通稱平四郎、錦織齋又は琴後翁と號し眞淵の門人。學和漢を兼ね博識を以て知られ又江戸第一の能文家と稱せられた。文化八年(一八一一)歿、年六十六。著書二十餘種、琴後集はその歌文を集めたもの。十五卷ある。
父　村田春道。
今年　文化七年。

琴後集

一　琴後集序

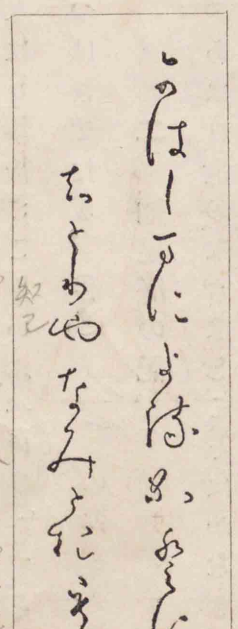
村田春海

村田春海

昔、父の世にいますがりし時は、遊びの道に深う心よせたまへりしまゝに、吹きもの・弾きもの、なにくれの器ども家に數多傳へたるを、こしごろ度々の火にあひて、今は多く失せもてゆきて、たゞ、あづま一つなんこれをのみ昔しのぶるくさはひには思ひたる。今年草の庵を改めつくりて、小さき伏屋を、己がつねに住みならさん所と定むるにつけて、思ひけるは、「かのあづまこそ己が家の寶なれ。いかで、これに所得させて、そのかたはらにこそ起きふしすべけれ。われ琴ひくことはならはねど、絲なきをまさぐりて思をやりしためしもあれば。」とて、これをわがかたらひ人にて、さて、ことがみに硯一つ、火とり一つ、ことじりに厨子一よろひをするゑて、年頃の言の葉ごもを入れたり。

絲なきを琴を弄んだことをいふ。晉の陶潛が無絃の

筆蹟
かはしまによるかとすればたちかへるちどりやなみとおもふどちなる　春海



このごろ、おのが心しりの人々詣來ていひけらく「年頃ものしたまへる言の葉ごもは、いかにしたまふぞ。かきあつめたまはましかば、われら筆たすけまゐらせん。」といふ。「そは嬉しきことなり。さるは拙き言の葉を、人なみに世に殘し侍らんことは、はづかしき

わざには侍れど、あまたたし、思を寄せ心をこめしものを、いたづらになしはて侍らんはほいなし。ともかくも然るべからんやうにとりなし給はんこそうれしけれ。」と、こたへければ、人々、かの厨子よりとうでて、かきあつめもてゆく。さて、「名をばいかに。」といふ。すなはち、「琴後ここそいふべけれ。」とて、その巻のはしつかたにぞ書きつけさせたる。（序文）

林にやどる鷦鷯

鷦鷯巢ニ深林一、不レ過ニ一枝一。偃鼠飲レ河、不レ過ニ滿腹一。（荘子、逍遙遊）

二　知足庵の記

あはれ、世のならはしこそはかなきものはあなれ。高きいやしき品いと異なりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは稀にて、唯足らはぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとては梢の嵐を恨み、月をめづるとては尾上の雲をいとふためし、誰かはのがるべき。「林にやどる鷦鷯は、僅かなるさ枝のかげをのみたのみ、流に水もとむる鼠は、たゞ腹ふくるゝに過ぎず。」ここそ古人もいひつれ。かゝることわりをだに分たば、限あるこの世に、限なきことを思ふべきかは。

栂尾の昔を

建久二年、僧栄西が宋より歸朝した時茶の實を持ち來つてこれを山城國栂尾の明惠上人に贈つたので上人は喜んでその種を深瀬の園に植ゑた。これが我が國の茶のはじまりであるといふ。

いにしへ人

知レ足者富。（老子第三十三章）

茲に中村のぬしなん、よく塵の世のけがしきをのがれて、萱の軒、松の樞に心の月をすましめ、花をつむ夕、閼伽をくむ曉、御佛につかふる暇ある時は、冰をくだき雪を煮て、栂尾の昔をしのぶめるわざにしも、心をなん慰めける。これやこの世に求むべきすぢをも忘れ、又人を羨むべきふしをも思はで、己が心から事足るわざにしもあれば、彼のいにしへ人のいひけんことわりにこそかなはめ。いでや、うつせみの世の限なき求ある際とは、日を並べてあげつらふべくもあらざりけり。うべなゝ、この住家をしも、足ることを知ることは名づけしこと。（巻十）

芳宜園大人　加藤千蔭。
九月八日　千蔭の歿したはこの月の二日。

縣居の庭　賀茂眞淵の門。

三　祭芳宜園大人墓文

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海、謹みて、芳宜園の大人のおくつきの御前に、菊の初花一枝をたむけ、香の木一片を燒きて、うなねつきて申さく、あはれ哀しきかも、君は我に十とせいひて一とせのこのかみにおはすなるが、今そのかみを想ひ出づるに、君はまさにさかりの齡におはして、我はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びにゆきかひたる時、朝にまゐるとては、君のみはかしのしりへに從ひ、夕にまかるとては、君の御袖のもとにすがりて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならん。書讀むとては、君を師とも尊み、歌作るとては、我を弟のつらにぞ訓へ給ひける。

中ごろにして、君は仕への道に暇なくおはし、我は世のさがにかづらひて、自ら疎き方にも過ぎつるを、君仕へをしぞき給ひて後は、我も同じちまたに移り住めば、花を尋ぬとては、われ道しるべをなし、月をおもふとては、君が舟にあひ乘り、うき事も俱に憂へ、嬉しきふしも俱に喜びて、世にありふるわざのまめごともあだごとも、かたみに隔てなく心をかはせること、今に二十年、そのはじめをくりかへし數ふれば、相友たること、既に五十とせにぞあまりける。さるを、今おくれ奉りて、いつの世にかあひ見ん、いづれの時にかことはん。常なきは人の身のならひぞと知るも、これを如何でか嘆かざらん、かゝるを誰かはよく堪へん。あはれ哀しきかも。

文の林世々に衰へ、言の葉の道日々にくだりゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今をすてて古にかへり、青雲の高き心しらひをもとめ、倭文機のあやあるみやびごとを貴みいへれど、くひぜを守り、舟に

くひぜを守り　宋人有二耕レ田者一。田中有レ株、兎走觸レ株、折レ頸而死。因釋二其耒一而守レ株。（韓非子）

舟にきだつくる
楚人有ニ涉レ江者一。其劔自ニ舟中一墜ニ於水一。遽刻ニ其舟一曰、是吾劔之所ニ從墜一。舟止。從ニ其所レ刻處一入レ水求之レ。（呂氏春秋）

藤原
持統・文武兩帝の朝。

寧樂
元明帝より光仁帝までの七代の御代。

堀河・鳥羽の御時
堀河帝の朝に堀河太郎百首、鳥羽帝の朝に堀河次郎百首があるがこゝは平安朝の歌の絶頂の頃以後に下らぬことをいふのであらう。

きだつくるこもがら、彼に泥みこゝに牽かれて、なほあやしみ咎むるたぐひは多く、たまあひてよくうけひく人なん稀なりしを、君ひとり心をおこして、遍くさとし、ひろく誘ひしより、近き人はまのあたり相うづなひ、遠き人は遙かになびき來て、古ぶりの歌、世にさかりになりにたるは、まことに君の力によりてなり。その自らよみ出でたまへる歌を見るに、古き調、新しき姿、とりぐに具はらざるはなし。その古をうつせるは、藤原・寧樂の御世に及び、後のたくみにならへるは、堀河・鳥羽の御時にくだらず。心におもふことは、口につくさざることなく、目に觸るゝものは、詞にのせざることなんあらざりける。これを見て、高きもみじかきも、めでたふこまざる人なし。又、ことごのみの人は、その名を君に知られては、身のおもておこしと思ひて、世にもほこり、君のひとうたを得ては價なき寶

清水濱臣
江戸の人。世々醫を業とした。通稱玄長、泊洒舍と號し、村田春海の門人。特に歌文に長じ名聲一世に高く權門貴族が招じて優待した。文政七年（一八二四）歿、年四十九。著書十數種、泊洒文藻はその文集。

にもかへじといひてぞ、深くよろこびける。然るを今こがねの聲忽ちやみて、玉のひゞき復び聞えずなりぬるは、わがごちのなげきのみかは、大かたの世人のうれひともいひつべし。これをいかでか惜しまざらん、かゝるを誰かは慕はざらん。あはれかなしきかも。わがかくことあげするを、泉の下にもさやかに聞しめし、天がけりてもはるかにみそなはせとなん申す。（卷十五）

泊洒文藻

清水濱臣

一　擣衣を聞く

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむも又しきる。雁がねの聲のきぬたをさそふにやあらん、きぬたの

音の雁がねにかよふにやあらん。あなあやし、あなあやし。そもこの音の悲しきか、住む里のさびしきか、うつをりのうきゆゑか。皆あらず、聞く人の心のわびしきなり。（卷二）

鱸のなます　吳人張翰、晉に仕へ、故郷の鱸を思出し官をすてゝ歸つた故事。

二　漁父辭

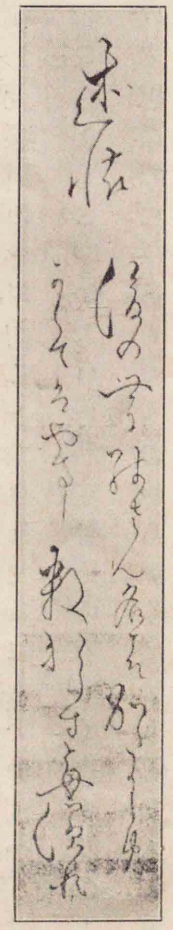
秋吹く風に耳欹てゝ、故郷の鱸のなます思ひ出でけん人こそ、げにさる事とは覺ゆれ。岸の額に老の涙をたゝみて、直なる針に王公の位釣り得し翁は、うらやましくもあらずや。我たゞ世を捨舟に棹さして、山陰のしづけく、水草の清からんあたりに、息の緒のかぎり心を遣りて、うへなき樂とはなしぬべきぞかし。（卷三）

王公の位釣り得し翁　太公望呂尚をさす。

三　月の夜友の許に

いざたまへ、もろ共に。この月のさやけきを、所せきつぼの内にのみやは見はて侍らん。なにがしがなりどころにまからん。それも、まらうどなど來あひて、あるじまうけする程ならば、それがしのかくれがにまからん。それも、ありきたがひて、あらぬ程ならば、北山の律師の室をおどろかし侍らん。それも、もし里におりたらん程ならば、うしろの山に上りて、夜もすがら、めであかさんを、いざたまへもろ共に、

筆蹟　述懐　後の世に殘さん名こそかたからめかくてはやまじ數ならずとも　濱臣



なべて世の塵をよそなる高山の松の梢の月をいざ見む

蘇迷廬の峯　須彌山。

蘇迷廬の峯までもこそ。（卷三）

四　水雞

殿へまゐりたれば、庭の遣水清うはしらせて、石のたてかたもか

どあるに、よしある梢ども色をふかめて、散りのこりたる卯の花垣もあはれおぼゆるを、かたへにはさゆり・なでしこ、今をさかりと色を交へて、露涼しげなる、こりゞ〳〵言はん方なきに、夕立ひとしきりして、光ぬれたる月影、波に浮べるに、釣殿のもとにて水雞のうちたたきたるが、耳にさしあてたるやうなるぞ、昔物語の心地していと艶におぼえけるかし。

（卷二）

五　紅葉

神代も聞かずとながめけん龍田の川の秋の末、水も無くとつゞけたりし大堰川の冬の初こそ、聞きわたるにも、いかばかりなる紅葉の淵ならましとゆかしけれ。吉野川の春のくれも花のしがらみかけて思はぬにはあらぬものから、かくばかり優なる紅葉の錦にはたち及ぶまじうなん。唐の何がしの江にさらすとか聞ける

神代もきかず
ちはやふる神代もきかず龍田川からくれなゐに水くくるとは（古今集、在原業平）
水も無く
水も無く見えこそわたれ大堰川岸の紅葉は雨と降れども（後拾遺集、藤原定頼）

も、知らぬ境思ひよそへられて、

縹色の帶かとまがふ河の面に
ゆはたと見えて散るもみぢかな　（卷二）

伴　蒿蹊

近江八幡の人。名は資芳。京に出て有賀長伯・武者小路實岳に學び、後獨力古學を研究して遂に一家を成し、歌文を以て一時に鳴つた。殊に和歌は所謂平安四天王の一人である。京の大佛の邊に住んで閑田廬といひ、自ら閑田子と云つた。文化三年（一八〇六）歿、年七十四。著書に近世畸人傳・閑田耕筆・閑田次筆等十數種がある。閑田文草五卷はその文集。

閑田文草

伴　蒿蹊

一　情は新しきをもて先とす

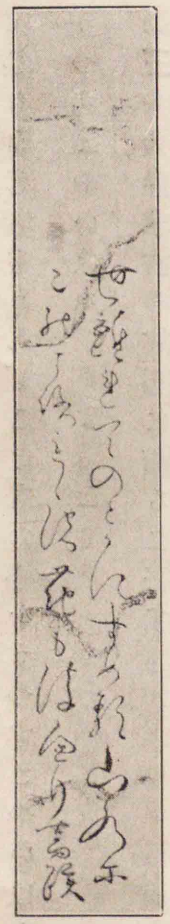
歌の詠みざまは、中昔よりこなた、賢き人々の教餘りなければ、拙きおのれ今更に何をか言はん。されど唯一つの思ふ事は、情は新しきをもて先とすといふなり。あしう心得ば、道なき所に道を求め、うばら・からたちにかゝりて、手足を傷ふべし。凡そ喜び悲しびの時に當り、花に月に對ふをり〳〵、又題の歌も、ひとしくまごころ

に思ふ所を打出づるは、新ならんと構へざれども、おのづからに新なる趣出で來べし。おのれまだ若かりし時、某の卿に從ひ侍りしに、卿教へ給はく、「何にまれ、得たる題を心にしめて案じめぐらす時、人に訣はず、己が誠より詠み出でなば、たとひ吉野の花を雲と見、龍田の紅葉を錦といはんも新しきなり。」と仰せられしは、年月を經ていよゝ味あるを覺えぬ。固よりよきあしきけぢめは、おのれおのれが才・不才によるものから、生れながらに知る人はあらじなれば、古を師として、心はすが〳〵しく直く、言はけだかく正しきをならふべし。かくてぞ姿も苦しげなくのびらかなるべき。見聞につけて心は移るものなれば、巧に新しきをむねとし、詞はた曲げかざりて興を求め、我賢しと構ふるには、ゆめ倣ふべからず。

某の卿　武者小路實岳。蒿蹊の和歌の師。

二　冬のこゝろ

花咲き實なりし木も紅葉を限りに冬がれ、木の芽はるさめも時雨にかはり、それも何時しか染めぬべきものなくなりぬれば、みぞれにうつりて雪と積る。一とせの月日は隙行く駒の程もなきかな。振分髪のうなゐ子が大人しくなりぬと言はれしなんやがて老の始にて、終に髭髪の白くなりぬるをしもつく〴〵と思ひ比べて、埋火のもとにのみうづくまるを、若き人々はさこそ見苦しと思ふらめ。我もまたしかぞありし。「少壯いくばく時ぞ、老をいかん。」とからうたにも聞ゆるを、徒らに朽ちはてぬる事の、今更に悔ゆるもかひぞなき。前の車のくつがへるを後の車の戒てふ事もあり。



筆蹟　世離れてのとかにすめる山水にこのころもゝの花も浮へり　蒿蹊

少壯いくばく時ぞ　歡樂極今、哀情多。少壯幾時今、奈二老何一。（漢武帝、秋風辭）

前の車の前者覆、後車戒。（說苑）

冬は歳の餘
冬者歳之餘。夜者日之餘。隱雨者時之餘。（魏略）

雪を集め
晉の孫康が雪を集めて書を讀んだ故事。

老いては
丈夫爲レ志、窮當ニ益堅、老當ニ益壯。

我にならひ給ひそよ。冬は歳の餘ともいふを、此の頃の雪を集め、長き夜を空しくないね給ひそと言はまほし。老いては益壯なるべしと勇みし人は、己が類にはあらず。唯寒きに堪へねば、ひたやごもりにこもる程に、眠は宵よりきざして、しかも夜深くは目覺めぬ。冬もうし、老もうし。こは、老の心をうつすとやいはん、冬の心をうつすとやいはん。

三　大森求古の故國に歸るに寄す

天地の間にありとあるもの、皆おのづからにうけえたる所あり。今、たゞ一つの鳥のうへもていはんに、木草の實を喰ふべきものと、這ふ蟲を喰ふべきものと、嘴のやう異にて、相通はぬあり、かれこれを共に喰ふべきあり。相羨むともかなふべからず。いかにともせんすべなかるべし。しかはあれど、口あれば喰ふべく、肩あれば

木によりて魚を求む
以ニ若所ヒ爲レ求ニ若所ヒ欲。猶ニ緣レ木而求ヒ魚也。（孟子、梁惠王篇）

資規
蒿蹊の子。

着るべし。肩ありて着ず、口ありて喰はざるは、誰があやまちぞ。上が上より下が下まで身のほどゞにつきて、世のわたらひをなすべきための心ばせといふものあり、手足あり。これはた、かの嘴のごと天の與ふる所にして、意を用ひて手足を休むるもあり、手足を動かして意を用ひざるもあり。ともに働かすべき際もあらん。されば、うけえたる所のまに〳〵、士・農・工・商、おのれ〳〵が業を守らひつとめなば、まどしとても飢ゑこゞゆるには及ばず。木つゝきの木の裏の蟲を求むるにはたらじを、暮るゝ明くゝに怠りながら、幸福を求むる人は、木によりて魚をもとむるにもたぐふべくなん。こゝに男資規の交をむすびし求古ぬし、年ごろ都に遊びながら、志を得ず、事たがひのみゆくに、近き年となりて、故郷のうから・はらからも皆ほろびて、繼ぐべき人なければ、強ひて歸り給はんことを催す

送るに言をもてす

贈レ人以レ言、重ニ于金石珠玉一。（荀子、非相篇）

易きにゐて

君子居レ易以俟レ命、小人行レ險以徼レ幸。（中庸）

人あるからに、力なく出立たんとし給ふに臨みて、「何にまれ、心の守になるべき言を述べてよ。」と求め給ふ。

おのれもとより才拙きが上に、老のならひのもの忘れ草心にしげりて、ふつにいふべきことを知らず。しかはあれど、送るに言をもてすなるは、古のよしとする所なれば、もだしもえあらで、言ふりたれど、易きにゐて命を俟ち、身を懈らずつとめ給はんことをすゝむ。かゝらばその家を起し給はんも難きにあらじ。はた年月都に馴れて、故郷ながら鄙の住居のものうからんもさることなれど、こもまた何か。天に月あり、地に花あり、四つの時の移り變るおのづからの景色をたのみて、心をのばへ給へや。

よしやゆけみやこも鄙もこゝろだに
やすくしへなばやすからん世を

弛めて張らざる

張而不レ弛、文武弗レ能也。弛而不レ張、文武弗レ爲也。一張一弛、文武之道也。（禮記）

松平定信

田安宗武の子で德川吉宗の孫に當る奥州白河の城主となり老中に任じ、文教を興し治績を擧げ、所謂寛政の改革を成す。五十五歳退隱して樂翁と號した。文政十二年（一八二九）歿、年七十二。定信和漢の學に通じ多くの著述がある。花月草紙六卷はその隨筆集である。

又「弛めて張らざる、文武はせず。張りて弛めざる、文武は能はず。」といふこをおもひて、

一つきの酒におもひをやりてまた
なすべきわざはよくつとめてよ

といふは、享和改元春三月なり。

花月草紙

松平定信

一　序

久しう浦わの里に住める翁ありけり。めかり鹽燒く暇には、えうなき藻屑かいあつめて、しほやの窓の戸にかいはさみ置きたるを、世のえせものの取りて歸りにけり。またの年行きて見れば、こ

りずまにかいはさみ置きたり。かく白浪のよる〳〵ごとに數も積みしかば、遂にこの卷々となりぬとぞ。この藻屑の端つ方に、月と花との事なが〳〵しく書いたれば、それをもて名たてしは、かのえせもののせしことなりとぞ。海人のさへづりとこそ言はまほしけれと里の子は言ひき。

二　花

なしと聞けば、ありといはまほしく、惡しといふをば善しとこそかへていはんこそ、いとねぢけたる事なれ。櫻てふ花は我が國のものなるを、唐國にもありとてさま〴〵例など引きつくれど、櫻かいたるもろこしの畫もなく、かなへりと思ふからうたもなければ、なしとこそいふべけれ。いでや櫻といはでしも、花とだにいへば、こと木には紛れぬものを。ほの〴〵と明けゆく山際、雲か雪かと

ばかり咲き滿ちたるも、霞こめたる夕まぐれ、花のけはひも朧に見えて、こゝにのみ暮れ殘すけしきなどいふは淺かりけり。まいて、うてなののびやかなれば近劣りするなどいふは、かのことかへてざえおふ心にいふことなりかし。

松平定信

風に散りかふも、雨に濡るゝも、遠山に見るも、軒端に向ふも、曙も夕暮も、露のひるまも、めかるゝ時しなきを、ことに我が國ぶりの姿にて、枝もすなほに花のかたちもゆたけく、匂さへこちたからぬも、あやしきまでにこそ覺ゆるものなれ。さるを、何處にもありといふは更なり、曙・夕暮などと面白からんやうにことば添ふるは、いまだ深く染めし心にはあらざりけり。すべて、こ

ことばもて言ひ盡さんと思ふは、いと淺き心かな。

三　月

月のさしのぼる頃、曙の空おぼえて、横雲のたなびきたるにやゝ匂ひそめたれど、遠山の梢にいざようて姿も見えず、からうじてさし昇りけり。梢のうさも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが近寄るほど、あやにくに月の方より雲のうちへかき入るやうに見ゆ。こはいかにせんとしばし打ちまもるに、雲の端つ方あかう見ゆるにぞ、出で離れたらばはやかゝらん隈あらじと思ふに、いつのまにかまた白雲の月待顔にたなびきて見ゆれば、胸うちつぶれて打見るに、はじめの雲より出でたる光いと新しう見えて、ことにさやけし。かの待ち居たる雲にむかへば、また馳せ入るもいとつらし。月の入りて見れば、雲もさすがにこちたからず。

心のはてなき
行方なく月に心の
すみ〳〵て果はい
かにかならんとす
らん（西行）

こゝかしこにそれと面影見ゆるにぞ、ひたすらに恨みはてで見ゐたるうちに、衣手もしめり行きて、露も蟲の音もさかりなりけり。つくづくと向ひゐたれば、心のはてなきやうに覺えしか。

四　天にまかす

久方の空に任せて、わがさゝやかなるざえを用ひざれとはいへど、空に任するに深き心あるべし。星の光見ても、はや沖はあらき風ふき出でつ、このあたりへは明日のひるつかた吹きくべしといふことを知れゝば、心して乘るを、空に任すとこそは言はめ。沖の風吹くも吹かぬも問はずして、今こゝの波平かなれば、はや漕ぎいでて行くを、空に任すとは言はじ。物食ふものにてもあれ、すべて身を養ふ道をつくし、その程をつゝしみて後、いきしにを空に任すべきを、養のことは心とせず、たゞおのがほりする事にのみ隨ひて

いきしにを空に任すといふこともありぬべし。

五　理窟

ことわりなきが、ことわりのまことなり。ことわりのごと行はるゝものならば、何の難き事もあらじを、さも知らで、人と爭ひ政を誹りなどしてたかぶる者は、ことわりのまことを知らぬとやいふべからん。

松の落葉

藤井高尙

松の屋と號する備中吉備津宮の祠官で正五位下長門守に任ぜられた。本居宣長に學び、特に物語を研究し、又雅文に名がある。京に出でて國學を教授した。天保十二年(一八四一)歿、年七十七。隨筆松の落葉・松の屋文集、外數種の著書がある

一　ものしりびと

こゝの書はさらなり、からのにまれ、天竺のにまれ、書をよみあきらめたるを、その道々のものしりびとといふべし。さる人は、あだしびとよりすぐれて、わが世の限りよきことをなさんと、おもひつとむべきことになん。さいふは、いづれの道も、あしきことなすをいさめ、よきことすべきやうをすゝめをしふる一筋なるに、それをあきらめしり、人のしるべをもするものの、自らはさせざらんは、天地の神いみじうにくみたまひ、とがめたまひ、世の人も、いたくそしるべき事なればなり。ましてあしきことしたらんは、その罪かいなでの人よりは千重まさりなんかし。

二　ものまなび

いにしへと今とは事こなることも多かれども、ものしれば、智といふもののほど〳〵に大きになれば、おもひはかりせまらずして、古かゝりつれば今はかう〳〵してこそと、なみならぬをかしきかうがへも出で來ぬべく、よき人になるわざにしあれば、上なくた

ふときものになん。かくめでたきものなるを、鳥獸はすぐれたるもえせず、わくらはに人と生れて學ばでやはあるべき。

しかにはあれども、學びたるがなか〳〵にしらぬよりはあしきこともあり。おのがものしれる程を見え知られんとして、かりそめのことばにも、人のえ聞き知るまじきことをいひ、おもちけしきほこりかに、人をばおとしめなどす。こはなまものしりの上にあることにて、いと〳〵にくげなりかし。

人は心の底つよくて、うはべはものやはらかに、大かたのことはおのが立てたる趣ありても、あらはにけやけく人と爭はず、おもひのどめて、やう〳〵にものすべくなん。かく心得て、こゝのまなびに、孔子のをしへをとりそへてものしたらんには、つゆの難なく、わが身のためはさらにもいはず、世のためにもなることぞかし。も

論語　孔子が弟子及時人に應答し又弟子が互に話した語を孔子の歿後門人の編纂したもの。四書の一。

のまなびといふものは、すべて人の心得によりて、よしあしいたくことなるものになん。

三　論語

からぶみの百書千書あるが中に、ひとりぬけ出でていはん方なくをかしくめでたきは、この論語といふ書なりとこそ思はるれ。

さるは、かしこき心のいたらぬ隈なき孔子の身の行と、弟子にをしへていはれたる言とを、しるしたる書なればなり。人の身の行のあるべきやうを、こまやかに教へさとしたるさまは、天地の中にまた類なかりけり。よきすぢとあしきすぢとは、たれも大かたは思ひわくなれど、その中に重さ輕さのある心しらひの、人の知りえがたき境を、殘る隈なく、明らかに言ひ教へたる書にぞありける。

おのれ、まだいと若かりし程より、身の行の心得にとて、をり〳〵

この書を讀むたびに、その教をげにさることぞと思ひ信じて、いかでいかで、さやうにせばやと志して年經にければ、拙くてなし得ぬものから、わが身の爲となりぬる事の多かるは、たれも同じ事ぞと、人のためをも思ひて、よその國の書なれど、これをよめとはをしへものするになん。

中島廣足

中島廣足　熊本藩士。通稱太郎、橿園又は黄口と號する。業を本居大平に受け、長崎に在つて二十餘年國學を教授し、後に大阪に移居したが文久元年召されて熊本に歸り、國學師範役となつた。元治元年(一三四)歿、年七十三。國學に關する著述が多い。橿園文集四卷はその文集。

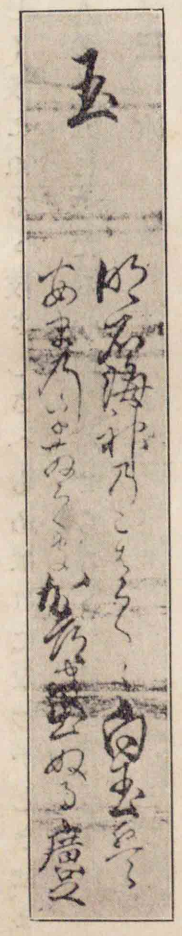
橿園文集

一　燕を題にて

いとうらゝかなる日、思ふごちうちつれゆく大路に、つばくらめのこなたかなた飛びかひて、ふと袖の下を過ぎたる、手にも捕へつべくていとをかし。雨のなごりのなほかわかぬ方などに下りゐて、ひぢを含みつゝ、童部の走りくるに驚き立ちて、遠く翔りゆくもをかし。梁に巣くひて、いつの程にかあまたの雛おほしたるが、飛びくる親を待ちて、口のかぎり開きつゝ鳴きさわぎたるさまは、いみじうこそあはれなれ。（記文）

二　山路の菊

木々の紅葉むら〳〵染めわたして、尾花が袖も人待ち顔にうち招く山道のいとおもしろきに、女郎花・蘭などのやう〳〵うら枯れゆく中より、今咲き初めたる菊の、露もとをゝに靡きいでたる、物よりことに目に立ちて、いとなつかしう覺ゆ。「この花開きて後。」など



筆蹟　玉
明石海神のこはし
し白玉はあまのを
さしぞかづき出ぬ
る　廣足

この花開きて後
不ニ是花中偏愛ニ菊。此花開後更無レ花。（和漢朗詠集、元稹）

うちずしつゝ、さかしき岩根を傳ひ登るほど、水音さへさやかにて、やう〳〵山深くなるまゝに、谷川の流、岩のはざまなど、異草も交らでいと多く咲き亂れたる、濃き薄きさま〴〵色をつくして、いとかうばしく、波にぬるゝ枝さしさへもあはれになつかしきは、まことに仙人の住家に來たる心地なんせらるゝ。（記文）

三　氷

荻の葉音もうらさびて、ふけゆく夜風のいたう寒きに、とひくる人もなければ、衾引きかづき打臥したるが、とみにもいねられぬぞ、老のさがなめる。炭櫃の火もたえ〴〵にて、いと長き夜のわびしきに、板戸のひまのやう〳〵しらみゆくは、あけぬなめりといと嬉しく、やをら起き出でて開きみれば、有明の月のさしいでたるなりけり。庭の落葉も霜深く見えて、筧の音のほのかになりぬるは、こ

ほりやしぬらんと、こゝろみに水瓶の瓢とりてひきあぐれば、手にもさはらず碎けたる氷の、いさゝかつきて上りたるが、月の光にきらめきたる、いと珍らかにをかしうなん。（記文）

四　漁村

海人の住家ばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海邊の、風もたまらぬ松蔭などに、唯かりそめに造りたる藁屋どものさま、波うちよせなば、やがて流れもうせぬべう、いとはかなげに見ゆるを、繪に書きすさびたるなどは、なか〳〵にをかしきものから、さて住みなば何心地かせましと、思ひやるだに心細し。

夕つ方など、年老いたるをのこの手がらみしたるが、磯邊に立ちて、「今日はいと遲くもあるかな。」などいひつゝ、沖つ方をまぼりをり。うまごどもにやあらん、眞砂の上を走りありきつゝ遊び居たるに、

入日さしたる島蔭より、三つ二つ歸り來る舟の、舵ひき折りてほこらしげなるを、老人待ち得顏にうちほゝゑみたるは、さち多かりしにやと見ゆ。渚によせて飛び下るゝまゝに、綱繰り寄せなど、どかくしつゝのゝしるに、男も女も數多出で來て、大きなる籠に魚ども取り入れつゝ、擔ひもて行くさまは、さはいへど賑はしげなり。くぐつめく物もて來て、小き魚三つ四つ乞ひもて行く童などもあり。すべて人多く立ち込み騷ぎて、舟のあたりかしがましく、さし寄りて覗くべくもあらず。いと長き網の、渚にかけ干したるを繰りためて、取り入れなど、やう〳〵靜まりゆけば、此方彼方、火ともしたる透影さへもあらはにて、いとあはれに見ゆ。

一夜宿りて見れば、浪風の響枕をゆすりて、露まどろまれず。曉方隣の家々目覺して、なりはひの事どもなるべし、あやしう聞き知

らぬ事どもを、おのがじし聲高にいひかはしたる、げに海人のさへづり、珍しうも、をかしうも。（記文）

五　夜學

寺々の初夜の鐘のひゞきもをさまりて、皆人もねたるに、いとうれしう、ともし火あかくしなして、文机にうち向ひたる、いみじう心すみて、晝見たりしあたりの、何心なくて過ぎにしも思ひ知られて、ふかき心ばへあるくだり〳〵もおのづから解き得らるかし。かかげつくしてもなほねぶたさも知らず、油さしそへつゝ見もてゆくに、遠き世の人もたゞさし向ひ語らふ心地す。册子つくりて、をかしきふし〴〵、あるはふと思ひ得たることなどをば、墨おしすりつゝ書きつけなどするもをかし。鳥の聲は、夜深きにやと思ふに、いとこく明けはなれたる、しばしとてうちねぶる夢のうちも、あだ

しごとならんやは。（記文）

國語讀本 卷九 終

広島県立広島工業學校
機械科第四學年生徒 英志所有
英志

昭和八年二月廿五日
文部省檢定濟
中學校國語科用

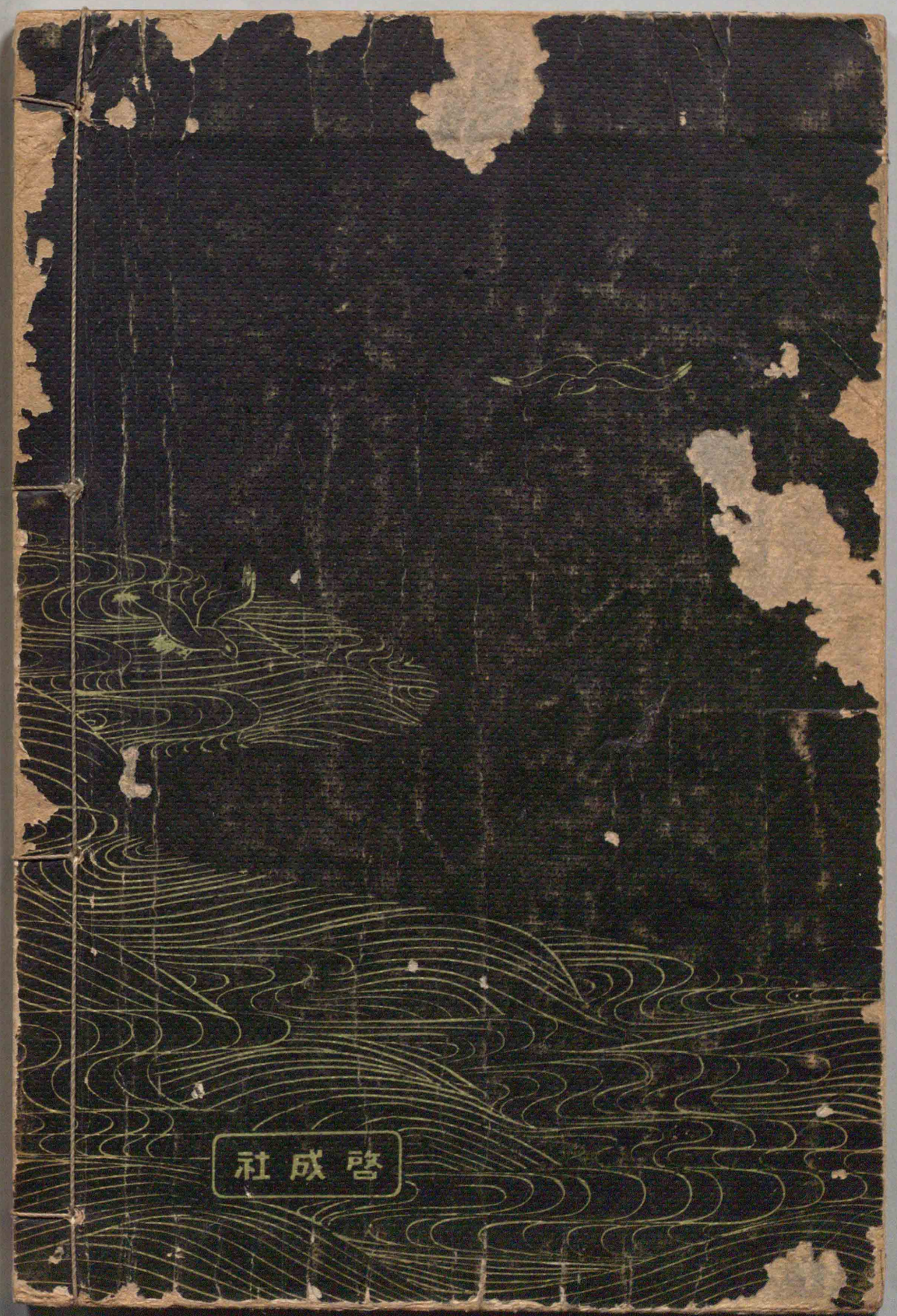
大正十三年十二月十六日印刷
大正十三年十二月十九日發行
大正十四年二月二十一日訂正再版印刷
大正十四年二月二十四日訂正再版發行
昭和三年十一月一日改訂印刷
昭和三年十一月四日改訂發行
昭和四年三月十二日改訂再版印刷
昭和四年三月十五日改訂再版發行
昭和七年十月二十二日改訂三版印刷
昭和七年十月二十五日改訂三版發行
昭和八年二月二十一日改訂四版印刷
昭和八年二月二十三日改訂四版發行

國語讀本新制版
（各卷 定價金六十錢）

編者 上田萬年
同 榮田猛猪
同 鹽野新次郎

發行兼印刷者 株式會社 啓成社
右代表者 布津純一
印刷所 啓成社印刷部

發行所 株式會社 啓成社
東京市麴町區丸ノ内三丁目六番地
電話丸ノ内(23)二六八六番
振替東京一二〇五五番


啓成社